

「安土山図屏風」をはじめとする 16・17 世紀の文化交流にかかる調査研究報告書 1

「安土山図屏風」研究の最前線

Rapporto di ricerca sugli scambi tra Giappone ed Europa nel XVI e XVII secolo,
incluso lo "Schermo Azuchiyama" 1

L'ultimo stato della ricerca sullo "Paravento Azuchiyama"

Reserch report on the 16th and 17th century Japanese-European exchanges,
including the "Azuchiyama Screen" 1

The latest status of research into the "Azuchiyama Screen"



2025年3月

marzo 2025

March 2025

滋 賀 県

Prefettura di Shiga

Shiga Prefecture

序

安土城は、織田信長が天下統一の拠点として、この近江の地に、当時の技術と文化の粋を集め築いた天下無双の大城郭で、信長の天下布武の理想を日本全国に、そして世界へと知らしめる拠点となった場所です。

また、安土の地は、信長が楽市楽座令を発して経済振興を図ったことで、多くのものや人が行き交う、首都のような賑わいを見せる町となりました。さらに、キリスト教宣教師に屋敷地を与え、セミナリヨ（神学校）の建設を許可するなど、日本が初めて西洋との交流を持った16世紀末期において、当時もっとも親密な交流が実現した場所でもありました。その交流の証しとして、信長は、安土城と城下町を描かせた「安土山図屏風」を宣教師ヴァリニャーノに贈りました。その屏風はヴァリニャーノが発案した天正遣欧使節の手によってヴァチカンのローマ教皇のもとに届けられたことにより、安土の姿は遠くヨーロッパにも伝わりました。

滋賀県では、「特別史跡安土城跡」を将来に向けて保全し、謎に包まれた安土城の姿を復元してその価値や魅力をより多くの人々に知ってもらうため、「幻の安土城」復元プロジェクトに取り組んでいます。そのカギを握るのが「安土山図屏風」です。ローマ教皇に贈られた後、今では行方不明となっているこの屏風を求めて、これまで昭和から令和にかけて多くの人が調査・研究を行ってまいりました。滋賀県でも屏風の行方を求めて、「安土山図屏風」等探索事業に着手し、「安土山図屏風」をはじめとする16・17世紀の文化交流にかかる調査研究検討会議を立ち上げました。本書は、この事業にかかる報告書で、これまでの「安土山図屏風」調査研究の成果をまとめたものです。本書が、今後の「安土山図屏風」調査研究の礎となることを願っております。

なお、本書をまとめるにあたり、安土図屏風探索ネットワーク（ASRN）のメンバーをはじめ、多くの方々にご協力を賜りました。心より感謝申し上げます。

2025年3月

滋賀県知事 三日月大造

例 言

1. 本書は、「安土山図屏風」をはじめとする16・17世紀の文化交流にかかる調査研究検討会議の事業報告書で、「安土山図屏風」調査研究のこれまでの成果と最新の状況をまとめたものである。
2. 本事業は、「幻の安土城」復元プロジェクトの3本柱之内、「復元に向けての機運醸成」事業として実施しているものである。
3. 本事業の事務局を滋賀県文化スポーツ部文化財保護課に置く。

滋賀県文化スポーツ部文化財保護課

課 長 永井利憲

参 事 武田朋子

参事員 木戸雅寿

安土城・城郭調査係

主幹兼係長 岩橋隆浩

専 門 幹 松下 浩

主 幹 大崎康文

副 主 幹 本田鉄兵

技 師 松田 篤

4. 本書の執筆分担は以下のとおり。

第1章・第4章 松下 浩（滋賀県文化スポーツ部文化財保護課専門幹）

第2章 新保淳乃（武蔵大学講師・ASRNコアメンバー）

第3章 木戸雅寿（滋賀県文化スポーツ部文化財保護課参事員）

目 次

第1章 事業の主旨と経緯・・・・・・・・・・・・・・・・・・	1
第2章 「安土山図屏風」調査研究の最新状況・・・・・・・・	6
第3章 「安土山図屏風」調査研究の歴史・・・・・・・・・・	27
第4章 「安土山図屏風」関連資料および解説・・・・・・・・	47
Riepilogo(Italiano)・・・・・・・・・・・・・・・・・・	61
Summery(English)・・・・・・・・・・・・・・・・・・	69

【表紙写真】オルテリウス世界図－日本専図－（部分 滋賀県立安土城考古博物館蔵）

ポルトガルのイエズス会士テセイラが作成した地図をアントワープ（現ベルギー）出身の地理学者オルテリウスが出版した地図帳（1595年刊）に収録したもの。日本の情報を詳細に記しており、ほぼ中央にWuomy（近江）の標記がある。

第1章 事業の主旨と経緯

松 下 浩

第1節 「幻の安土城」復元プロジェクトと「安土山図屏風」

令和元年度にスタートした「幻の安土城」復元プロジェクトは、謎に包まれた安土城の実像を解明し、目に見える形にすることにより、安土城の価値・魅力を広く発信し、県および地域の盛り上がりにつなげることを目的として実施している事業である。プロジェクトは大きく三つの柱で構成されている。

第1の柱は、「安土城の実像解明と保全」で、謎に包まれた安土城の実像を解明するため、安土城跡の発掘調査を進め、その価値を長く守り伝えるために保存整備に取り組むというものである。令和5年度から20年計画で特別史跡安土城跡調査整備事業に着手し、発掘調査と環境整備を進めている。

第2の柱は、「デジタルによる安土城の見える化」である。明らかになった安土城の実像を目に見える形にする方法は実物復元からデジタル再現まで様々なものがあるが、プロジェクトの中で十分検討した結果、現状、特別史跡に実物で復元することは難しく、デジタル技術を用いて見える化を実現することに決定した。令和5年度から滋賀県立安土城考古博物館の展示リニューアル工事に着手し、現在、弥生時代・古墳時代をテーマに展示を行っている第一常設展示室を映像シアターに改修し、最新のデジタル技術で作成した安土城復元CGを盛り込んだ映像を上映する。また、安土城復元CGや発掘調査成果など様々な情報を提供するアプリを制作している。

第3の柱は、「復元に向けての機運醸成」である。安土城復元に向けて、調査研究の現状や、安土城に関する様々な情報を、セミナーなどを通して発信し、安土城への関心を高めようと努めている。

安土城の復元にあたっては、安土城に関する資料の調査研究が不可欠であるが、なかでも安土城の外観を描いた唯一の絵画資料として最も重要な資料と位置付けられているのが「安土山図屏風」である。織田信長が安土城と城下町を描かせ、ローマ教皇に献上された後、今では行方不明となったこの屏風を求めて、これまでも、滋賀県や安土町（現近江八幡市）が現地調査を実施しているが、発見されていない。「幻

の安土城」復元プロジェクトでも、そうした位置づけのもと、「安土山図屏風」の探索を行うべきとして、「安土山図屏風」等探索事業を立ち上げた。

第2節 「安土山図屏風」等探索事業の経過

「安土山図屏風」等探索事業は3つのステップで事業を組み立てている。第1ステップでは、何の手がかりも無いまま現地調査を行なうのは時間的にも経費的にも無駄が多いとして、まず「安土山図屏風」をはじめとする安土城関係の資料の情報収集を行うことからスタートした。

令和3年（2021）10月26日付けで滋賀県ホームページ上に「安土山図屏風はどこに～Looking for materials related to AZUCHI-JO castle」と題するサイトを公開した（<https://www.pref.shiga.lg.jp/ippan/bunakasports/bunkazaihogo/321174.html>）。このサイトは日本語の他に、英語、イタリア語、スペイン語、ドイツ語、フランス語、ポルトガル語の6ヶ国語で作成している。これらの言語は、『安土山図屏風』が移動した可能性が高いと考えられる6ヶ国の言語である。またホームページの公開と同時にサイトと同名のチラシを作成し、古美術商など古文書や古絵図などの歴史的な資料を扱う機関に送付した。また、海外の県人会事務局にホームページの拡散を依頼した。こうして「安土山図屏風」をはじめとする安土城関係資料の情報を広く求めているが、今のところ新たな資料に関する情報提供はない。

つづいて第2ステップとして知事による関係機関への訪問と、専門研究者や屏風調査関係者への意見聴取を実施した。令和4年（2022）1月19日、三日月大造知事が駐日ローマ教皇庁大使館と駐日イタリア大使館を訪問し、「安土山図屏風」の探索について協力を依頼した。また、令和5年（2023）5月23日、大杉住子滋賀県副知事がバチカンを訪問し、文化教育省長官など文化関係の高官を訪問し、屏風探索への協力と今後の継続的な交流について、知事の親書を手渡し、直接お願いした。同年11月3日には奥村芳正滋賀県会議長がバチカンを訪問し、引き続いての交流と令和7年に開催される大阪・関西万博などの来日の機会に滋賀県へ招待したい旨の知事の親書を手渡し、直接そうした意向を伝えた。

また、長年「安土山図屏風」の探索に携わってきた安土図屏風探索ネットワーク（A

S R N)のコアメンバーである新保淳乃氏(武蔵大学講師)、パオラ・カヴァリエレ氏(大阪大学特任教授)、マーク・アードマン氏(メルボルン大学講師)と面会し、今後、情報交換を続けていくことを確認し、以後継続して情報のやり取りを行っている。

事業のステップとしては今後、有益な情報が寄せられた場合には現地調査を実施し、所有者と交渉して県への移管を検討することとしている。

このほか、プロジェクトの第3の柱である機運醸成に関する事業として歴史セミナーを開催しているが、セミナーのテーマとして「安土山図屏風」を取り上げている。開催記録は以下のとおり。

【令和3年度】

テーマ：安土城復元研究の現在

開催日：令和4年1月29日(土)・2月5日(土)・2月19日(土)

会場：INBOUND LEAGUE 新宿(東京都新宿区新宿5-15-14)

内容：「安土山図屏風」のゆくえ 新保淳乃(武蔵大学講師・ASRNコアメンバー)

天主復元研究と「天守指図」について 木戸雅寿(滋賀県文化スポーツ部文化財保護課参事員)

文献資料に記された安土城 松下浩(滋賀県文化スポーツ部文化財保護課主幹)

天主・本丸跡の発掘調査成果 岩橋隆浩(滋賀県文化スポーツ部文化財保護課主幹)

出土遺物が語る安土城 仲川靖(滋賀県文化スポーツ部文化財保護課副主幹)

参加者：83名

【令和4年度】

テーマ：安土城復元研究の過去・現在・未来

開催日：令和5年3月25日(土)

会場：コラボしが21(滋賀県大津市打出浜2-1)

内容：安土城天主復元研究史 木戸雅寿(滋賀県文化スポーツ部文化財保護課参事)

員)

安土城天主復元の最新研究 中村泰朗 (広島大学講師)

安土山図屏風調査の現状 新保淳乃 (武蔵大学講師・ASRNコアメンバー)

文献資料にみる安土城天主 松下浩 (滋賀県文化スポーツ部文化財保護課主幹)

昭和の天主跡発掘調査成果 仲川靖 (滋賀県文化スポーツ部文化財保護課副主幹)

平成の天主跡発掘調査成果 岩橋隆浩 (滋賀県文化スポーツ部文化財保護課主幹)

パネルディスカッション 安土城復元研究の過去・現在・未来
木戸・中村・新保・松下・仲川・岩橋

参加者：156名

【令和5年度】

テーマ：「安土山図屏風」研究の最前線

開催日：令和5年9月16日(土)

会場：コラボしが21 (滋賀県大津市打出浜2-1)

内容：「安土山図屏風」等探索事業について 松下浩 (滋賀県文化スポーツ部文化財保護課課長補佐)

ヴァン・ウィングが描いた安土城図屏風スケッチの再考 マーク・アードマン (メルボルン大学講師・ASRNコアメンバー)

「安土山図屏風」について 木戸雅寿 (滋賀県文化スポーツ部文化財保護課参事員)

パネルディスカッション「安土山図屏風」研究の最前線

松下・木戸・アードマン・新保淳乃 (武蔵大学講師・ASRNコアメンバー)

参加者：173名

【令和6年度】

テーマ：「安土山図屏風」研究の最前線Ⅱ

開催日：令和6年10月26日（土）

会場：コラボしが21（滋賀県大津市打出浜2-1）

内容：「安土山図屏風」のスケッチをめぐって 竹本千鶴（國學院大学講師）

「安土山図屏風」をかながえる2 木戸雅寿（滋賀県文化スポーツ部文化財保護課参事員）

パネルディスカッション「安土山図屏風」研究の最前線Ⅱ

木戸・竹本・松下浩（滋賀県文化スポーツ部文化財保護課専門幹）

参加者：63名

令和6年度からは、機運醸成に関する事業として「『安土山図屏風』をはじめとする16・17世紀の文化交流にかかる調査研究検討会議」を立ち上げた。この検討会議では、イタリア美術やキリスト教、日欧交流などの研究者とともに研究会議を行い、日欧の文化交流の歴史について知見を共有し、「安土山図屏風」探索に向けての手がかりを探ることと、研究会議で共有した知見を歴史セミナーで一般向けに公開することを事業の柱としている。また、この検討会議の結果を報告書にまとめ、「安土山図屏風」調査研究の最新の成果を公開するとともに、図書として残すことでその成果を共有できるようにすることを目指している。本報告書はその第1号として、「安土山図屏風」のこれまでの調査成果をまとめ、現在の研究水準を示そうというものである。



チラシ「安土山図屏風はどこに？」

第2章 「安土山図屏風」調査研究の最新状況

新 保 淳 乃

第1節 はじめに

本稿は、「安土山図屏風探索ネットワーク（ASRN）」を代表して、「安土山図屏風」調査研究の現状と成果を示すものである。ASRNは旧安土町が平成16年（2004）に着手した安土山図屏風の探索事業を引き継ぐかたちで、平成28年（2016）に現代美術家の杉本博司のイニシアチブで結成された有志の研究者グループであり、これまで数次にわたり、美術史家の太田智子とエリアン・ルーを現地調査員としてヴァチカン、ローマ、および他都市に派遣して史料調査を行い、その報告書に基づき公開シンポジウムでの口頭報告および学術論文で成果を公表してきた。^{（1）} 幸いにもこの新たな学術調査への関心は高く、筆者は令和4年1月と令和5年3月に滋賀県歴史セミナーにて紹介する機会を得た。ASRNの調査活動の概要は別稿に記したため、本稿ではASRNの調査研究により明らかになった事柄と新出史料を示したうえで、近世ヨーロッパの東洋学者ネットワークに関する研究成果を述べたい。^{（2）}

第2節 安土山図屏風の贈呈の経緯と新出史料^{（3）}

天正遣欧使節は、天正13年（1585）3月23日にヴァチカン教皇宮殿王侯の間で教皇グレゴリウス13世と枢機卿ら高位聖職者が揃う公開枢機卿会議にて、公式に外交使節として迎えられた。ウルビーノ公宛の同月30日付「ローマ通信」をはじめ、この公式謁見とともに屏風に言及する同時代史料が多いことから、使節はこの場に屏風を含む外交贈答品を持ち込み、贈呈の儀礼を行ったものと思われる。

令和元年度のルーの調査により、後述するパドヴァの東洋学者サークルの中心であったピネッリの旧所蔵資料から、安土山図屏風の物理的描写を含む新史料が発見された。^{（4）} ミラノのアンプロジアーナ図書館に一部移管されたピネッリ文庫に、ローマからピネッリに宛てた複数の報告書簡をまとめたファイルが存在する。まず天正13年（1585）3月23日付のローマ在住逸名イエズス会士からの報告書（VBA, D 490 inf., fols. 95rv-96r）は、同日の公開枢機卿会議で日本人使節が教皇グレゴリウス

13世に公式に謁見し、式典中に使節から屏風が贈られたと記す。より重要なのは1580年代にローマ情報をピネッリに送ったフィリッポ・ピガフェッタの通信と推定される、同月30日付の報告書であり、「インディオの君主たち〔天正遣欧使節〕が携えてきたのは、全体に鍍金され装飾の施された木の小机、日本王国の重要な2都市の様子を道路と建物まですべて描いた2枚の板絵で、杉の木でできたもの、救世主が描かれた非常に美しく布で装飾された書き物机である。これらは日向、有馬、都の王の名において教皇様に献上する品々である。公開枢機卿会議でも、彼らは日本にある豊後の王からの書簡を贈った。極薄の木の皮に記された書簡は、彼が老齢とうち続く戦のため自ら来訪できなかったことを詫びる内容だった」と既出史料にはない情報が含まれている。⁽⁵⁾もし「杉の木で」が安土山図屏風を形容するとしたら、杉材を使った和紙を指すのか、それとも杉板による裏打ち処理を指すのか慎重な解釈が求められる。後者の場合、ヴァリニャーノの指示で屏風を水害から保護するためコーチンで特別な櫃が準備された際⁽⁶⁾、屏風が杉板で裏打ちされ、2枚1組の対画のように加工された可能性を強く類推させる。屏風の形状を巡る認識を改める必要も生じるため、今後の調査に重大な影響を及ぼす史料と言えよう。さらに別のファイルに綴じられたローマ通信では、「教皇および他の人々に献上するため、彼らはかの地の多様な品々を持ち来た。〔中略〕彼らが教皇に献上した物品の中に一点の絵があり、そこにはノブナンガと呼ばれる日本の中心的都市が描かれ、高さは4ブラッチャ、幅は4から5ブラッチャ」と書かれている。⁽⁷⁾この記述は、書き手がローマで屏風を実見したか、イエズス会の日本宣教について知る人物を介して、信長にまつわる都市の図像と知っていたことを示しており、イエズス会の極東宣教の成功を象徴する物品としてピネッリに情報提供された点でも重要である。

グレゴリウス13世の側近だったイエズス会士ジャン・ピエトロ・マッフエイが教皇の伝記執筆のために用意した手稿の記述によれば、公開枢機卿会議の翌日、使節はグアスタヴィッラーニ枢機卿や教皇実子のソーラ公らが同席する非公式の会談の場で教皇の質問に答えている。⁽⁸⁾さらに、モデナ国立文書館所蔵のテオドシオ・パニッツァからエステ枢機卿宛の4月5日付書簡によると、「昨日、日本人たちは教皇に印象付けようと、文台、豊後の王〔原文ママ〕が造営した都市が目立つように描かれ、

かの国の動物たち、騎馬の男たち、馬ではなく牛に乗る人々、女性、当地の衣服など細部まで描かれた絵（una tavola）の他、犀の角の杯などすべて少なからず価値のある物を渡した」。^{（9）}使節が屏風その他の贈物を教皇に渡したこの非公式謁見の場所について、シクストゥス5世時代に教皇庁ラテン語文書秘書官を務めた人文主義者グイド・グアルティエリが、使節到来の翌年にローマで出版した『日本人使節に関する報告』小冊子で確認できる。その90頁に、4月4日にヴァチカン教皇宮殿内で使節と会ったグレゴリウス13世は「自ら先導して居室へ案内し、信仰の品々を見せた。それから長くたいへん美しいガッレリーアの扉まで使節たちをお連れした。これは教皇ご自身が造営させたもので、多様な都市や国々を表わす巧妙なる絵画で飾られていた。同伴した侍従長ビアンケット師にゆっくり鑑賞させるよう命じた」とある。^{（10）}信長から安土山図屏風を贈られ、遣欧使節を立案したイエズス会東インド管区巡察師ヴァリニャーノは、日本への帰路にゴアに寄港した使節からじかに渡欧の成果を聴き取り、彼らの日誌等を元に『使節記』を執筆した。そこでも4月初頭の非公式謁見にて「贈物にたいへん満足した」教皇は、使節を「ガッレリーアと呼ばれる、ベルヴェデーレ庭園への教皇専用通路」に案内し、「多くの装飾が施されたこの張り出し廊下に、安土山を描き表した絵を置くよう命じた」と書かれている。^{（11）}

これらを総合すると、使節から教皇へ安土山図屏風が物理的に渡されたのは4月4日であり、その際に教皇は「ベルヴェデーレの中庭に連絡する教皇の私的通路」で「世界各国の地図と都市図が描かれた壮麗な廊下」に安土山図屏風を飾る意向を示した。しかし翌週の4月10日にグレゴリウス13世が急死し、同月24日にペレッティ枢機卿が次の教皇シクストゥス5世として選出されるまで短期ながら教皇空位期間（セーデ・ヴァカンテ）となったことも災いして、グレゴリウスの意向どおり屏風が「廊下」に置かれたのか、またその後誰の管轄下で、いつどの場所で、どのように保管されたかについては、未だ史料的裏付けが得られていない。

第3節 教皇庁および教皇出身一族の動産目録調査

安土山図屏風は、施主の信長からこれを受け取ったイエズス会にとっては日本宣教の成功の物質的証拠であり、教皇庁にとっては極東から来た初の日本使節がもたらし

た外交贈答品である。これは狩野派の初期屏風絵に数えられ、極東の都市と城山を詳細に描いた希少な工芸品として見ると、非西欧美術に関心のある蒐集家や東洋学者がその存在を知ったならば垂涎の的となってもおかしくない。

そこでまず、グレゴリウス13世没後にその実子であるソーラ公ジャコモ・ボンコンパーニ1世が私蔵した可能性が浮かぶが、筆者も参加した平成19年の旧安土町学術調査によりこの仮説は概ね否定された。⁽¹²⁾ シクストゥス5世時代以降に屏風がヴァチカン教皇宮殿内に残されたとしても、歴代教皇の誰かが一族に所有権を移すこともあり得るため、ASRNでは平成29年と30年に太田が教皇宮殿の物品管理史料および歴代教皇出身家系の動産目録の調査を行った。

ヴァチカン秘密文書館、ローマ国立文書館、カピトリノ歴史文書館には、ヴァチカン及びキリナーレの教皇宮殿とその保管庫（フロレリア）の物品を管理する複数の役職ごとに目録史料が保管されている。調査可能だった1585年から1726年までの史料には、安土山図屏風に関係する記述がないことが確認できた。⁽¹³⁾

教皇一族については、まず比較的在位期間の長い教皇に絞り、ペレッティ家（シクストゥス5世：在位1585. 5. 24～1590. 8. 27）、アルドブランディーニ家（クレメンス8世：在位1592. 1. 30～1605. 3. 5）、ボルゲーゼ家（パウルス5世：在位1605. 5. 16～1621. 1. 28）、バルベリーニ家（ウルバヌス8世：在位1623. 8. 23～1644. 7. 29）の動産目録と遺言書を精査した。⁽¹⁴⁾ その過程で、ウルバヌス8世の甥、フランチェスコ・バルベリーニ枢機卿が没した明和9年（1679）に作成された財産目録に、「一方には風景が描かれ、他方には地図が描かれた4面から成るリブレット型の衝立1点」の記述が発見された。⁽¹⁵⁾ この記述は裏表に図像装飾のある間仕切りとも読めるが、桃山期の狩野光信筆《肥前名護屋城図屏風》のように地形を俯瞰する構図で城と城下を描く作例もあるため、安土山図屏風が安土山と城下を分けて描いた四曲一隻の形式だった可能性を鑑み、史料の種類と時代を広げてこの物品の追跡調査も行った。これまでのところ、安土山図屏風に該当する記載は確認できない。

第4節 ウィングの模写と2点の木版画の関係

安土山図屏風に関する現存唯一の図像史料として、ルーヴァン出身で、ローマでキリスト教考古学および非西欧世界の宗教を研究したフィリップス・ファン・ウィング（1560～92）の模写に基づく木版画2点が知られている。これらは古典学者・文献学者のロレンツォ・ピニョリア（1571～1631）がヴィンチェンツォ・カルターリ『古代人の神々の姿』第二部として、近世の「両インド」すなわち南北アメリカと東アジアを対象に編纂した『インドの神々の姿』の増補改訂版（ヴェネツィア1624年）に初めて掲載された（図1・2）。^{（16）}同書570頁には、「先に挙げたフィリッポ・ウィンゴミオは彼のある紙葉に、高い崖の上にある日本の神々の神殿を素描した。日本の大使たちが持ち来たり、教皇グレゴリウス13世に贈った絵画から抜き出したと語っていた」と編者ピニョリアによる注釈が付されている。^{（17）}

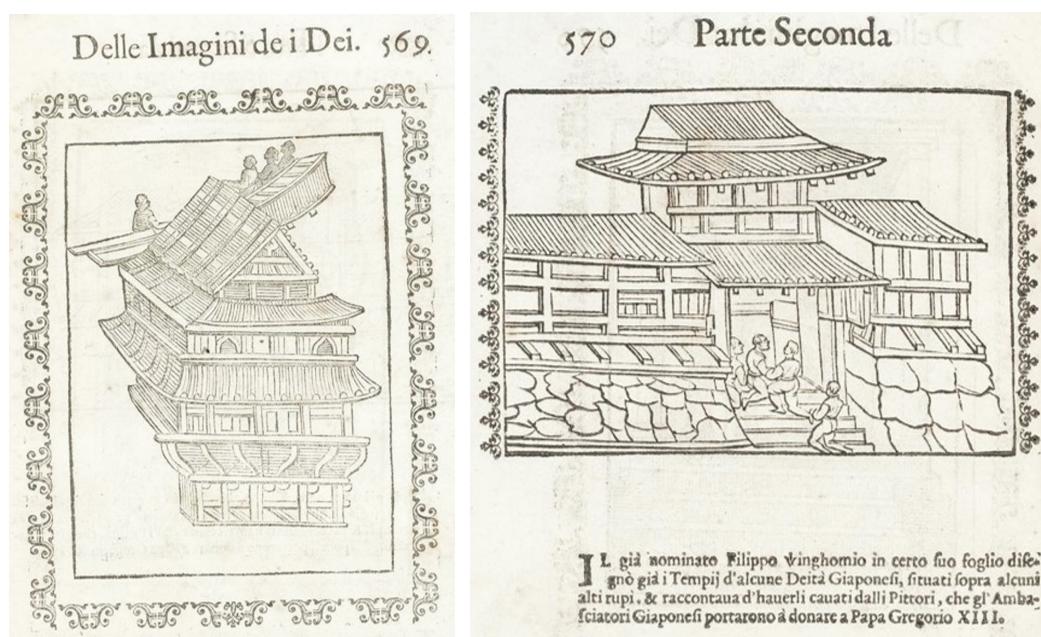


図1・2

ウィングが安土山図屏風の一部をスケッチできたのは、彼がローマに滞在した天正17年（1589）11月から文禄元年（1592）7月末までの約2年半の間である。彼はこの翌月フィレンツェに行き、マラリアに罹って客死した。ローマ滞在末期の7月13日または15日付の地理学者オルテリウスに宛てた書簡により、ウィングはこの日の午前中にヴァチカン教皇宮殿の「地図の廊下」（Galleria delle carte geografiche）に入る許可を得て、同廊下壁面のラツィオ地図を模写したことが判明しており、平成19年の旧安土町学術調査では、ウィングはこの時に地図の廊下で屏

風を実見し模写したと結論づけていた。⁽¹⁸⁾

ウィングが安土山図屏風の一部を模写したスケッチは所在不明であるが、彼が多岐にわたる研究成果を文字と図像で書き記した複数のノートブックのいずれかに含まれていたと推定される。その一例がベルギー王立図書館に収蔵された「小さなノートブック」（以下ウィング画帳）で、ウィングがローマ滞在中に携帯し、調査研究のメモとスケッチおよび時事を詳細に記した手稿が一冊に綴じられている。⁽¹⁹⁾ ASRN 調査の一環として、アードマンとルーがこのウィング画帳を分析した結果、彼はヴァチカン図書館が所蔵する永禄9年（1566）頃作成のリオス写本（BAV, Vat. Lat. 3738）からケツアルコアトル像と古代エジプト諸神像の複数の紙葉を模写しており、すでにスフッデボームと竹本が指摘していたとおり、彼は伯父が仕えたグランベール枢機卿の人脈を辿ってヴァチカン図書館の所蔵資料に複数回アクセスしたことが確認できた。したがって、彼が文禄元年7月以前にヴァチカンの別の場で屏風を見た可能性も、またヴァチカン以外の場で見た可能性も現段階では否定できない。屏風を受け取ったグレゴリウス13世が設置場所としたヴァチカン教皇宮殿内の「廊下」の特定についても、上記の諸資料を再検討すると、ベルヴェデーレの中庭に面した西翼の「地図の廊下」のみならず、サン・ダマソの中庭を囲む北翼の「世界地図の廊下」（Galleria della cosmografia）の可能性も考慮すべきである。⁽²⁰⁾

スフッデボームの研究では、フィリップス・ファン・ウィングの死後、ローマの友人ジャン・ルルーが彼の遺稿をトゥルネー在住の彼の次兄ジェローム（ヒエロニムス）に送り、文禄4年（1595）または慶長2年（1597）までに受領したジェロームからトゥルネー大聖堂に寄贈されたと推測されていた。これを手がかりに、ルーがオルテリウス書簡とベルギー王立図書館目録データベースを詳細に分析し、ウィングの遺品の移動経路を確認した。⁽²¹⁾ 以下に簡潔に記しておく。

ウィング急逝を受け、甥マキシミアンの依頼でルルーがフィレンツェで遺品を回収した。大理石等を含むと思われる「貴重品」が第1便として文禄3年（1594）4月にローマから発出され、11月にミッテルブルクに到着、アントワープのオルテリウスが受領し、トゥルネーのジェロームに送った（フランス革命、第二次大戦中の爆撃で焼失）。画帳・手稿を含む書籍類は第2便として慶長2年（1597）10月

以降にヴェネツィアから船に積まれ、おそらく同年末か翌年に同じくオルテリウスが受け取り、一部手稿を保管のうえトゥルネーに送付された。ジェロームは寛永14年（1637）の没後に弟の遺品を含むと思われる自身の蔵書約六千冊をトゥルネー大聖堂参事会に遺贈したほか（フランス革命時に一部は市庁舎に避難、一部は散逸し、一部はベルギー王立図書館に収蔵）、生前から弟の業績の詰まった画帳・手稿を友人の学者らに寄贈したり貸与したりしていた。晩年は甥マキシミリアンに遺品管理を任せている。先に挙げた画帳もこの甥から古物蒐集家J・J・シフレが譲り受け、他の2点のウィング手稿とともにアントワープのボランディストに寄贈し、後年売り立てに出されて最終的にベルギー王立図書館が購入した。同館の未整理史料あるいは別の場に安土山図屏風のスケッチを含む紙葉か画帳が存在する可能性は捨てきれない。

ウィングの手稿はローマ滞在中に親友の人文主義者ルルー、歴史家アロンソ・チャコン、キリスト教考古学者アントニオ・ボシオ、そしてアントワープの地理学者オルテリウスの間で参照され、古代研究ばかりか最新の東西インド地域研究にも活用された。例えば、チャコン旧蔵の手稿（ローマ、アンジェリカ図書館蔵）に、ウィングによるリオス写本からの模写と注釈を複製した頁が含まれている。

ピニョリアは『インドの神々の姿』初版の改訂に際して、ウィングがリオス写本のケツアルコアトル像を模写したスケッチまたはその写しをドイツ出身の画家、版画家、古物蒐集家のフィリップ・エセンングレン（イタリアではフェッロヴェルデ）の手で木版画に起こさせ、1624年版に「トゥルネーの博学な若者フィリッポ・ウィングelmiオの手になる紙から写した。彼はピエトロ・デ・ロス・リオスが編纂し現在ヴァチカン図書館にある大判の書から抜粋したと述べた」という説明文とともに掲載した。⁽²²⁾ このことから、ウィングによる安土山図屏風のスケッチもその写しを介してピニョリアの編著に収録されたと仮定できる。

重要なことに、ファン・ウィングの手稿を参照した知識人への交友関係から、17世紀前半に西欧各地を結ぶ東洋学者の知的ネットワークが浮かび上がり、ウィングの安土山図屏風の模写がピニョリアの編纂した『インドの神々の姿』に木版画として掲載されるまでの経緯が再構成された。

これら東洋学者たちの書簡史料を丹念に見ていくと、まず、エクサンプロヴァンス

を拠点とするニコラ＝クロード・ファブリ・ド・ペーレスク（1580～1637）が慶長12年（1607）にトゥルネーのジェローム・ファン・ウィングを訪問し、ウィングの手稿を借り出したと思われる。彼は元和2年（1612）8月30日付のジェローム宛書簡で手稿は複製完成後に返却すると約束し、別のウィング手稿の貸し出しを要請した。元和9年（1623）6月22日の書簡でペーレスクが返却すると伝えたこの第2の手稿に、安土山図屏風のスケッチが含まれたと推定される。^{（23）}

この間の元和2年（1616）1月4日にペーレスクがパドヴァのピニョリアに宛てた書簡に安土山図屏風に関する言及があることが、リッツァにより指摘されており、近年マッフェイが同書簡の抜き書きとして「日本の使節が献上した絵画から採られた山の頂上にいる日本人〔・・・〕、軍旗、幟、旗が見え、道の左右に旗隊ずつ配されて、大きな旗は10人の男達により支えられていた。これらの旗隊の内には楽器も見え、寺のなかに入っていくようだ」と紹介した。^{（24）}ピニョリア編著になる『古代人の神々の姿』を翻訳した大橋は、解題にてマッフェイの引用文を和訳した際、上記文章を1つのものと解釈し、既知の2点の木版画のもととなったウィングの屏風のスケッチはより大規模であった可能性を示唆した。平成30年12月に太田がエクサンプロヴァンスのアンガンベルティーヌ図書館にてこの重要な書簡の原本を確認したところ、先行研究の誤読が判明した。太田によるペーレスク書簡の正確な転写と和訳から、文脈が分かる部分を以下に抜き出しておく。

〔前略〕グアルド氏が手配してくださったローマの諸本がようやく到着しました。その中には、貴方のカルターリの本〔1615年改訂版〕もありました。大変多くの情報が付加されて、旧版と見違えるほどに改訂されており、大変高尚で興味深いものとお見受けしました。もし版画家（破壊者と言うべき）がしっかり役目を果たしていたならば、この書物は最も評価の高いあらゆる書物にも比肩するものとなっていたはずです。

〔中略〕大変に興味深いインドに関する数多くの小さな事柄も含め、多くの古代遺物に関する〔情報を〕いずれ貴方にお渡しできるよう努めます。

これらのなかには、左足を曲げて右足を曲げずに座り、首には護符のように二

重の首飾りをぶら下げ、手には香袋を持つケツアルコアトルがあります。これはある本から採られたものです（貴方はかの本を改訂するにあたり既にご覧になったはずですが、もしくはアレアンドロ氏が貴方の代わりに）。その本はヴァチカン図書館にあり、偶像の全ての祭式、メキシコ人の暦を含むもので、ドミニコ会のスペイン人修道士ピエトロ・デ・ラス・リアス〔原文ママ〕が編纂したものです。

私が持っているもう一つの偶像は、花々や葉で飾られた四角い台座の上に座す象牙で出来た裸体像〔中略〕。

さらには、日本の使節らが教皇グレゴリウス13世に献上した絵画から写し取られた、山の頂上に建つ日本人の寺院。

キリスト教の行列のような中国の行列、そこには軍旗や幟、旗を運ぶ姿が見え、そのなかでも最も大きな旗は2人の男たち、通りの一方から1人、他方から1人により持ち運ばれており、その中央には、何らかの神の名を表す文字と数字を認めることができる。そのうえ、排簫その他の楽器が見え、寺院のなかに入っていくようだ。

鹿を伴う何らかの神もしくは何らかの名高い祭祀を表す像のまわりで、笛その他の楽器をもつ8人か10人の人物像から成るバックス祭のような図像のある大きな中国のメダル。その他、多くの細々としたものがあり、日々整理するつもりです〔後略〕。⁽²⁵⁾

この書簡でペーレスクがピニョリアに提供を申し出た「インドに関する事柄」のうち、リオス写本に由来するケツアルコアトル像と、日本の使節が教皇に献上した絵画に由来する「寺院」は、明らかにウィングの画帳または紙葉からの模写であり、ピニョリアの編著書増補改訂版に使用されたことから、実際にこれらの図像資料がエクサンプロヴァンスからパドヴァへ送られたと見なせる。続く「中国の行列」の細かな描写に比べると、屏風の模写（の模写）の説明は簡潔で、ペーレスクが借りたウィングのスケッチ原本に「寺院」以外は何も描かれていなかった可能性も高い。ただし、それが日本使節の献上した絵から山上に建つ寺院を模写したものとペーレスクが理解しているため、ウィングのスケッチに同じ内容の注釈が付されていたと考えられる。

すなわち、ウィングは屏風に描かれた安土山と城下町のうち、山頂に建つ「日本人の寺院」を意識的に抜き出したものと推測でき、そのためには彼がイエズス会関係者や使節を支援したファルネーゼ家周辺の人物から屏風に描かれた事柄について具体的な情報を得ていた、と考えるのが妥当であろう。

第5節 近世ヨーロッパにおける「人文学／書簡の共和国」と日本情報

最後に、生前のウィングに日本情報を提供し得た人物、また17世紀になって「インド」すなわち日本を含む東洋研究の成果を交換し、安土山図屏風に関心を抱き得た人物を絞り込むために、書簡で東洋情報をやり取りしていた知識人のネットワーク、通称「人文学／書簡の共和国」についてルーが調査した結果を提示したい。⁽²⁶⁾

このネットワークは、すでに触れたように、エクサンプロヴァンスをハブに、トゥルネー、パドヴァ、ローマの各拠点をつないでいた。

1) トウルネー

1つめの拠点は南フランドルのトゥルネーで、ウィングの遺産を受け取った兄ジェローム、ウィングのキリスト教考古学研究を活用したドニ・ド・ヴィリエ、ジャン＝ジャック・シフレがいた。先に見たように、複数のウィング手稿がジェロームから南仏のペーレスクに貸し出され、彼が作成した複製の中から安土山図屏風のスケッチの写しがパドヴァのピニョリアに提供されている。

2) パドヴァ

2つめの拠点は北イタリアのパドヴァで、人文主義者・植物学者・書誌学者・収集家のジャン・ヴィンチェンツォ・ピネッリ（1535～1601）を中心に知的サークルが形成された。

パドヴァにおける東洋研究拠点となったピネッリ邸には化石、鉱物、貨幣、数学や天文学の機器、地球儀と天球儀などのコレクション、9千冊の蔵書と750点の写本を擁す図書館、植物園があり、図書館には知識人たちとの書簡の他、1570年代から80年代にローマ、ヴェネツィア、アントワープ、パリ、リヨン、ケルン、イスタンブールと各地から送付された政治的動向の報告文書も保管されていた。ピネッリが死去すると、蔵書の大部分はフェデリコ・ボッロメオ枢機卿に買い取られ、ミラノ

のアンブロジアーナ図書館に収蔵された。ルーが同館のピネッリ文庫を調査したところ、彼は天正13年から翌年にイタリア各地で多く出された天正遣欧使節に関する出版物を集めただけでなく、天正7年（1579）から10年間のイエズス会宣教師日本報告の抜粋や宣教師文書の複製を蒐集し、「極東に関する書籍」一覧を作成するほど日本に特別な関心を注いだ。この関心が天正遣欧使節の到来を契機とすることは想像に難くない。ピネッリは地理、歴史、数学に関する論考を残し、日本を含む「インド」への幅広い関心をもって蒐集、研究、後継の育成に当たった東洋学者であった。

実際、ピネッリの周辺には天正遣欧使節と関わりのある人物が複数みいだせる。

まず、イエズス会の後見人枢機卿アレッサンドロ・ファルネーゼの侍医として永禄5～12年（1562～69）にローマで外交官として活動したジロラモ・メルクリアーレ（1530～1606）は、その後パドヴァ大学医学部教授に着任すると、ピネッリと急速に親睦を深めた。伊東マンショたちは天正13年7月6日から8日までパドヴァに滞在し、聖アントニウス聖地聖堂を参拝後、ヴァリニャーノの母校であり、メルクリアーレが教えるパドヴァ大学と植物園を訪れ、オルテリウスの『地球の舞台』をはじめ西欧の最新の科学的書物を贈られている。この間、使節がファルネーゼ家と所縁の深いメルクリアーレや東洋学者ピネッリと会わなかったとは考えにくい。

なお、使節がまだローマに滞在していた天正13年4月下旬に早くもヴェネツィアで刊行された同使節の来訪記は、メルクリアーレに捧げられている。同書はパドヴァとヴェネツィアを拠点とする活版業者、司書、編集者のパオロ・メイエットにより、おそらく彼が収集した使節の情報を編纂して出版された。メイエットは1571年から88年の間にメルクリアーレの医学書5点を出した版元で、その関係から使節来訪記の献辞先にメルクリアーレが選ばれたものと推測される。⁽²⁷⁾これだけではメルクリアーレ自身の使節への関心は測れないものの、同書は使節から贈られた屏風を「ノブナンガと呼ばれる日本の主要都市を描いた絵画で高さ2ブラッチャ、幅4または5ブラッチャ」と特筆しており、メイエットはメルクリアーレのファルネーゼ家人脈で早々に日本使節と屏風の情報を入手していたか、あるいは本稿第2節で新出史料として紹介したピネッリ宛のローマ報告を参照したと思われる。

同じくピネッリと親しかった書誌学者で図学者のフルヴィオ・オルシーニ（152

9～1600)はローマでファルネーゼ家古物コレクションの管理を任せられ、カプラローラまたはローマで天正遣欧使節の贈物を実見し得る立場にあった。彼は古物への関心からローマ滞在中のウィングと頻繁に交流しており、安土山図屏風についての情報源の可能性もある。

また、パドヴァを出た天正遣欧使節が7月9日にヴィチェンツァに立ち寄りテアトロ・オリンピコを訪問した際、使節を歓待したアカデミア・オリンピカの会員でヴィチェンツァ大聖堂参事会員だったパオロ・グアルド(1553～1621)は高い確率で使節に会っている。この5年後、教皇庁で彼を庇護したカスターニャ枢機卿が教皇ウルバヌス7世(在位1590.9.15～27)として選ばれ、グアルドは教皇庁請願長官を拝命するも、わずか13日で教皇が死去したため翌年パドヴァに戻り、司教コルネルの保護とピネッリの薫陶を受けた。その後断続的にローマに滞在し(1600, 1602, 1606～9, 1614～15)、パドヴァとローマを結ぶ役割を果たしたグアルドは、「中国」の文物に傾倒していたことが確認できる。⁽²⁸⁾

ピネッリが育てた若い世代の東洋学者、グアルド、ピニョリア、そして後述のジロラモ・アレアンドロは、いずれもローマに出て研究と人脈を蓄積しており、東洋学者ネットワークの中でパドヴァとローマは一体的な核として捉えられる。彼らとの間で日本を含む東洋・インド情報を共有したのが、ペーレスクである。

3) エクサンプロヴァンス

エクサンプロヴァンスを拠点とするペーレスクは、慶長4～6年(1599～1601)に数ヶ月パドヴァのピネッリ邸に逗留してグアルド、ピニョリア、アレアンドロと親交を結び、フランドル、ローマ、パドヴァをつなぐ知的情報網を築いた。⁽²⁹⁾

ペーレスクとピニョリアは慶長5年(1600)から東洋研究に関する情報をやり取りしており、協力関係の成果のひとつが、ベンボ枢機卿旧蔵の「イシス祭壇」を研究したピニョリアの古代エジプト論(*Ventustissima tabulae eneae...explication*, 1605)である。ペーレスクは継続的にピニョリアに古物研究の最新情報や画像資料を提供しており、その一部はピニョリアの草稿(BAV, Barb. Lat. 2102)に収録されたが、その中に安土山図屏風の素描はない。ピニョリアの蔵書やコレクションについてはトマジーニが出した書籍で知ることができる。往復書簡はヴァチカン図書館、フラ

ンス国立図書館、そしてピネッリの蔵書を引き継いだミラノのアンブロジアーナ図書館に所蔵され、一部は刊行された。⁽³⁰⁾

4) ローマ

ピニョリアは慶長7年(1602)にピネッリ・サークルに属したパドヴァ司教マルコ・コルネルの秘書兼司書となり、コルネルに随行して慶長10～12年(1605～1607)までローマで過ごした。ローマではバロニウス枢機卿、シピオーネ・コベルツィ(1618年からヴァチカン図書館司書)と会い、アカデミア・リンチエイの科学者と親交した。ピニョリアはパドヴァ帰還直前の慶長12年12月にグアルドに宛てて、シピオーネ・ボルゲーゼ枢機卿は日本を含む東洋由来の物品を蒐集しており、自分こそ枢機卿専属の古物研究家にふさわしいが、宮仕えより自身の研究で名声を打ち立てたいと吐露している。⁽³¹⁾ 彼がローマで培った人脈はパドヴァ帰還後も続き、『インドの神々の姿』編纂のため、ガリレオ・ガリレイにメディチ家の東洋コレクションの模写を依頼している。最晩年の寛永7年(1630)に、後述するアレアンドロが秘書として仕えたフランチェスコ・バルベリーニ枢機卿の仲立ちでトレヴィーゾ大聖堂聖堂参事会員の位を得た。

ピニョリアに「インド」情報を提供した書簡から明らかになったように、ペーレスクの情報源のひとつは慶長20/元和元年(1615)までローマにいたグアルドであった。グアルドはパドヴァ時代にペーレスクと会って以後、古物研究家・収集家としてローマからペーレスクに情報を送った。⁽³²⁾

グアルドがパドヴァに戻ったあと、ペーレスクは詩人ジロラモ・アレアンドロ(1574～1629)と頻繁に情報交換した。⁽³³⁾ アレアンドロは人文主義者として名高い同名のジロラモ・アレアンドロ枢機卿の甥の子で、パドヴァ大学で学びローマに出た。布教聖省創設に尽力したオッタヴィオ・バンディーニ枢機卿の秘書官を慶長9年(1604)から務め、慶長15年(1610)頃からマッフェオ・バルベリーニ枢機卿と親交を結んだ。マッフェオ枢機卿がウルバヌス8世(在位1623～44)として教皇に選ばれると、その甥のフランチェスコ・バルベリーニ枢機卿をラテン語秘書官として補佐した。ペーレスクとアレアンドロはパドヴァで知り合い、慶長10年(1605)まで書簡をやり取りしたが、グアルドのローマ滞在中は関係が途切れ、

元和元年（1616）6月から往復書簡を再開している。

フランチェスコ枢機卿は教皇の甥として教皇庁行政のトップの地位にあり、アレハンドロはその秘書官という特権的地位を生かして多様な資料を参照し収集できたと思われる。実際にアレハンドロは世界各地の人・物・知が集積するローマの重要な情報源であり、ペーレスクら「人文学／書簡の共和国」以外にもヨーロッパ各地の知識人と情報を交換していた。⁽³⁴⁾ アレハンドロは日本の信仰について論考を書いた形跡があり⁽³⁵⁾、ローマのイエズス会が所蔵した日本の仏像15点の模写をピニョリアの『インドの神々の姿』初版のために提供するなど、東洋学者の中でも日本への関心が特に顕著である。

興味深いことに、ペーレスクとアレハンドロは、親交のあった画家に朝鮮風俗や日本の結髪など具体的な情報を提供していた。例えば、ルーベンスがアントワープのイエズス会聖堂のために描いた「聖フランシスコ・ザビエルの奇跡」（1617／18年、ウィーン美術史美術館）や、パリのイエズス会修練院のためフランス王室建造物総監がニコラ・プッサンに注文した「鹿児島信徒の娘を蘇生するザビエル」（1641年、ルーヴル美術館）に日本人信徒の現実的描写がみられる。⁽³⁶⁾ この知見は、美術史研究の観点から日本情報の流通について考察する意義を示していよう。また、寛永6年（1629）に没したアレハンドロの手稿と蔵書はフランチェスコ枢機卿に遺贈されたため、バルベリーニ家文書の日本情報を精査する必然性が高まった。

第6節 おわりに

本稿では、安土山図屏風探索ネットワーク（ASRN）の調査研究として太田およびルーが平成29年から令和2年までに行った現地調査結果に基づき、安土山図屏風を巡る学術研究の現状を示した。屏風およびそれを遠くローマの地まで運んだ天正遣欧使節が、近世ヨーロッパに極東を含む東洋への新たな関心を引き起こしたことは、使節到来の直後から各地の外交官が送ったローマ報告や、使節の動向や日本情報を説く多くの小冊子の出版に端的に現れている。それだけにとどまらず、17世紀に入ってから、フランドル、プロヴァンス、北イタリア、そしてローマを結ぶ知識人たちの知のネットワークを通じて日本の地理、宗教、風俗に関する情報が広く共有されてい

た。その象徴が、安土山図屏風を実見したフィリップス・ファン・ウィングの手稿であり、そこに含まれた日本の建築物のスケッチであった。

今般の調査では、安土山図屏風に関する新たな記録や探索の手がかりとなる史料を発見し、先行研究の誤りを修正するという成果を得られた。さらに、屏風を実見し得た人物や場所、屏風に関心を抱き何らかの行動や記録を残し得た人物をある程度絞り込めた。ASRNとして今後は、屏風を含む極東由来の工芸品が17世紀以降の教皇庁および他の場でどのように受容され、どのような日本および東洋理解を促したのかに調査対象を広げ、近世東西交流史の視座に立って調査研究を進めていきたい。

注

- (1) ASRNは杉本氏の全面的な支援のもと、相原玄（杉本スタジオ）、平成19年に旧安土町事業として現地調査を行ったパオラ・カヴァリエレ（宗教社会学、ミラノ大学）と筆者（イタリア美術史）の他、マーク・アードマン（日本建築史・美術史、メルボルン大学）、アントン・シュヴァイツァー（日欧物質文化史、九州大学）をコア・メンバーとし、太田智子（イタリア美術史）とエリアン・ルー（美術史・アーカイヴ学）が現地調査を担う体制をとる。さらに橋本麻里、山本英男、千田嘉博、シルヴィオ・ヴィータ（故人）、藤川真由にアドバイザーとして協力を仰ぎ、メルボルン大学、九州大学、小田原文化財団と学術的提携関係を結んでいる。
- (2) 本稿で述べる研究成果は実際に調査を行った太田、ルー、およびASRNに帰属する。彼女らの詳細な報告書は未刊行であるが、ASRN公式サイト（azuchiscreens.org）にて順次公表を予定している。その一部をまとめた以下の論考を、本稿と合わせて参照されたい。新保淳乃「安土山図屏風のゆくえ」（『バチカンに眠る日本の記憶』角川文化振興財団2023年）。Mark K. Erdmann and Éliane Roux, “Recent Research on the Azuchi Screens.” (*Journal of Asian Humanities at Kyusyu University*, vol. 9, Spring 2024).
- (3) 以下調査先機関は略称を用いる。ヴァチカン教皇図書館（BAV）、ヴァチカン枢密図書館（ASV、現 AAV）、ローマ国立文書館（ASR）、ローマ、カピトリノー歴史文書館（ASC）、ミラノ、アンブロジアーナ図書館（VBA）。
- (4) Erdmann and Roux 2024.

- (5) VBA, D 490 inf., fol. 90r. ‘Li Prencipi Indiani hanno portato [...] due quadri di tavole depinti con li ritratti di due gran città del Regno del Giappone che hanno tutte le strade, e li ediffici, di legno di cedro[...].’
- (6) 長崎からゴアまで使節に同伴したヴァリニャーノは、使節とともにローマに出立するヌノ・ロドリゲス宛に天正11年(1583)12月12日付の55項目の指示書を用意し、その中で「屏風はコーチンで特別に購入した大きな櫃に入れ[中略]雨に当たったり濡れたりしない場所に置くこと」と書いた。José Luis Álvarez Taladriz, “En el IV Centenario de la Embajada Cristiana de Japòn a Europa. Las “Instrucciones” del Visitador Alejandro Valignano, S.J. (1583).” (*Sapientia, The Eichi University Review*, 16, 1982).
- (7) VBA, ms. P 251 sup., fol. 87r. ‘Per donare a Sua Santità et altri hanno portato varie cose di suo paese [...] fra l’ altre cose che donorno a Sua Santità fu un quadro dove è depinta la città principale del Giapone detta Nobunanga quale è alto due bracia, e longo quatro.’
- (8) BAV, Archivio Boncompagni-Ludovisi, D. 15, 16.
- (9) 新保訳。東京大学史料編纂所編『大日本史料第11編別巻1』(東京大学 昭和35年)。
- (10) Guido Gualtieri. *Relationi della venuta degli ambasciatori giapponesi a Roma fino alla partita di Lisbona* (Roma, F. Zanetti, 1586).
- (11) Alessandro Valignano. *De Missione Legatorum Iaponensium ad Romanam Curiam*, translated in latin by Duarte De Sande(Macau, 1590). ‘Inde ad pergulam quandam, Galeriam nomine, delati sumus, qua Summo Pontifici privatus est transitus ad amoenissimum hortum, nomine Belvederium, a bello scilicet, & egregio aspectu ita nominatum. [...] In ea pergula tantopere ornata, iussit summus pontifex collocari tabulas illas, quibus Anzuchiamae descriptio erat appicta, ut ostenderet, munus nostrum inter non contemnenda numerari.’
- (12) ヴァチカン枢密文書館ボンコンパーニニルドヴィーシ文庫収蔵の「一六一二年ジャコモ・ボンコンパーニ1世の息子グレゴリオの財産相続公証人文書および財産目録」(ASV, Archivio Boncompagni-Ludovisi, Prot.581, n.1.)に屏風の記載がない。若桑みどり、新

保淳乃、パオラ・カヴァリエレ『安土町政策推進課事業２００６年安土町屏風絵探索プロジェクト学術調査報告書』（安土町 平成２１年）。

- (13) １５９２～１６１２年のフロレリア動産目録と１５８７～１６２０年の教皇宮殿内教皇日用品目録（ASR, Fondo Camerale I, buste 1557, 1558）、１５８５年３～１２月の教皇庁会計院出納簿（ASR, Fondo Camerale I, registri 933, 1569）、ウルバヌス８世時代に教皇宮殿が取得した絵画の支払い記録（ASV, Palazzo Apostolico, Computisteria 5324）、１７２６年にフロレリア（倉庫）の管理者が作成したヴァチカンとキリナーレの教皇宮殿の動産目録（ASV, Palazzo Apostolico, Amministrazioni, 179）。Cfr. 太田智子「２０１９年５月ローマ現地調査の報告および今後の調査の展望」（ASRN未刊行報告書 令和元年）。
- (14) ペレッティ家—１５８７～１６５５年作成の遺言書と動産目録（ASR, Camerale I, Tesoreria Generale, registro 1570; Acquisti e doni, busta 25; Notai Auditor Camerae 6645; ASC, Archivio Cardelli, Appendice I, Tomo 16）、同家所有邸宅の動産目録（ASC, Archivio Cardelli, Appendice I, Tomi 29, 89, 91, 92）。ボルゲーゼ家—当主マルカントニオ２世の不動産・動産・書類目録（ASV, Fondo Borghese, serie IV 73 bis）、リニャーノ公フランチェスコ・ボルゲーゼと、シクストゥス５世の甥の枢機卿フランチェスコ・ペレッティ・モンタルトが相続した遺産目録（ASV, Archivio Borghese 456）。バルベリーニ家—フランチェスコ枢機卿の遺言状（ASR, Notai Auditor Camerae, 813）および１６２６～３１年と１６４９年の動産目録（BAV, Archivio Barberini, Computisteria, 152, 159; ASR, Notai A.C., Belletti; Notai A.C., 814）、ウルバヌス８世が１６２５～３６年の間に甥の枢機卿２人に贈与した動産目録（BAV, AB, Indice II, 2690）、パレストリーナ領主マッフェオの１６８５年の目録（BAV, AB, Indice II, 2451）、その兄で枢機卿カルロの１７０４年と１７３８年の目録（BAV, AB, Indice II, 2460 B; 2453bis）。Cfr. 太田 前掲報告書。
- (15) BAV, Archivio Barberini, Indice II, 2447. ‘Un paravento fatto a libretto di quattro foglie dipinto da una parte con paesi, e dall’ altra con carte di Geografia.’ Cfr. Ota Tomoko. *Ricerca a Roma. I documenti consultati dal 27 al 30 giugno 2017* (ASRN未刊行報告書 平成２９年)。

- (16) この木版画に注目したライトボーンとラッチは無批判に「安土城天主」と「城門」と見なし、20世紀の日本の安土城研究もそれを踏襲してきた。スフッデボームのウィング研究に基づき、この2点の木版画を16世紀後半のヨーロッパの歴史的文脈に再定置した竹本の研究に触発され、ウィングの逸失した原画と木版画の関係の解明、狩野派の絵画様式に照らした木版画の図像分析が進められている。Cornelis Schuddeboom, *Philips van Winghe: (1560-1592) en het ontstaan van de christelijke archeologie* (Ph.D.Dissertation, Universiteit Leiden 1996); Schuddeboom, “Een onbekende tekening van Philips van Winghe (1560-1592).” (*Nederlands Kunsthistorisch Jaarboek* 38, 1987); Schuddeboom, “Research in the Roman Catacombs by the Louvain Antiquarian Philips van Winghe.” (I.Bignamini ed., *Archives & excavations : essays on the history of archaeological excavations in Rome and southern Italy from the Renaissance to the nineteenth century*, 2004). 竹本千鶴「「安土図屏風」を描き遺したフランドル人」(『日蘭学会会誌』34(1) 平成22年(2010)3月)。大橋喜之「解題 ロレンツォ・ピニョリア版—変身する書物」(カルターリ、ピニョリア『西欧古代神話図鑑大鑑[続篇] 東洋・新世界編』八坂書房 平成26年(2014))。Mark K. Erdmann, *Azuchi Castle: Architectural Innovation and Political Legitimacy in Sixteenth-Century Japan* (Ph.D.Dissertation, Harvard University, 2016). 先行研究では1626年版が初掲載とされてきたが、平成30年の太田とルーの調査により、寛永元年に当たる1624年ヴェネツィアのエヴァンジェリスタ・デウキーノ版が初出であり、2年後にパドヴァで再版された際も同じ木版画が使用されたことが確認された。
- (17) Pignoria 1624. ‘Il già nominato Filippo Winghomio in certo suo foglio disegnò già i Tempij d’alcune Deità Giaponesi, situati sopra alcuni alti rupi, & raccontava d’haverli cavati dalli Pittori [*sic*], che gl’Ambasciatori Giaponesi portarono a donare a Papa Gregorio XIII.’
- (18) このオルテリウス宛書簡はライデン王立大学図書館蔵(BPL, 2766)。J. H. Hessels. *Abrahami Ortelij(geographi Antverpiensis) et virorum eruditorum ad eundem et ad Jacobum Colium Ortelianum(Abrahami Ortelij sororis filium) epistulae*...(Cambridge 1887, reprint, Osnabrück 1969); G.L.Bertolini. “Su l’Edizione italiane

- dell' Ortelio.” (*Scritti in Onore di Giuseppe Dalla Vedova*, 1908). Cfr. 若桑、新保、カヴァリエレ 前掲報告書。
- (19) 竹本 前掲論文。
- (20) Erdmann and Roux 2024. 新保 前掲論文。
- (21) 1594年5月14日付、1595年3月18日付、1597年10月25日付ジャン・ルルーからオルテリウス宛書簡、1594年11月7日付ニコラス・ド・フリースからオルテリウス宛書簡 (Hessels 1887 所収)。追跡調査に際しトゥルネー大聖堂図書館・文書館司書デホーフェ博士から助言と協力を得た。
- (22) Pignoria 1624. ‘Un’ altra imagine di Homopoca [...]. La quale però altri chiamano Quetzalcotl & s’ è havuta fuori di certi fogli, e furono di Filippo Winghemio da Tornay, dottissimo giovane, & esso asseriva dhaverla cavata da un Libro grande, ch’ è nella Libreria Vaticana, compilato da F. Pietro de los Rios.’
- (23) 1609年ペーレスクから Valavez への書簡 (Carpentras, Bibliothèque Inguimbertaine, ms 1821, fol. 496)。1612年8月30日付ペーレスクからジェローム宛書簡 (Id. Ms 1876, fol. 686)。Cfr. Schuddeboom 1996.
- (24) Carpentras, Bibliothèque Inguimbertaine, ms 1875, fols. 308. Cfr. Cecilia Rizza. *Peiresc e l’ Italia* (Torino, Giappichelli, 1965); Sonia Maffei. “Cartari e gli Dei del Nuovo Mondo: il trattatello sulle Imagini de gli dei indiani di Lorenzo Pignoria.” (*Vincenzo Cartari e le direzioni del mito nel Cinquecento*, Roma, GBE, 2013).
- (25) Carpentras, Bibliothèque Inguimbertaine, ms 1875, ff. 308r-309r. 同じ書簡集にはフェルディナンド・パーチ、ピション、ユーク・ピエール、ピニョリア、カッシアーノ・ダール・ポッツォに宛てた書簡、グレゴリウス13世の側近で古代貨幣・宝飾品蒐集で知られたレリオ・パスクアリーニの甥ポンペオ宛の書簡が収録されていた。閲覧時間内に精読したかぎり、日本、安土山、屏風に関する記述は確認できなかった。太田智子「フランス、カルパントラ市アンガンベルティーヌ図書館における調査報告」(ASRN未刊行報告書 平成31年1月)。
- (26) 以下の記述は未刊行のASRN報告書に拠る。Éliane Roux, *ASCRN Report on Philips*

- van Winghe and Network. Winter 2018 Research Period* (ed. by M.K.Erdmann, 25 April 2019); Roux. *ASRN Report on the Rome-Padua Network of Antiquaries and Far East(17th Cent.). Summer 2019 Research Period* (ed. by M.K.Erdmann, August 2020).
- (27) *Relatione del viaggio et arrivo in Europa et Roma de' principi giapponesi: venuti a dare obediencia a Sua Santità l' anno MDLXXXV*(Venezia, Paolo Meietto, 1585.4).メイエットは同年4月18日付でオッタヴィアーノ・ヴァリエルへの献辞を伴う『日本王国の王侯たちの大使についての記述』という別の使節関連書も出版した。
- (28) グアルド家は1618年にイエズス会総長から極東由来の茶碗を譲り受けた。N. Basilio. *Museo Gualdo di Vicenza nei secoli 16. 17* (1644; Vicenza, 1854).
- (29) Jean-François Lhote et Danielle Joyal. *Correspondance de Peiresc et Aleandro* (Clermont-Ferrand, 1995, 2 vols.).
- (30) Jacopo Filippo Tomasini. *V.C. Laurentii Pignorii Pat. Canonici Taruisini historici, & philologi eruditissimi Bibliotheca, et Museum* (Venezia, 1632); *Lettere d' uomini illustri* (Venezia, 1744); Caterina Volpi. *The Antiquarian interests of Lorenzo Pignoria (1571-1631)* (M. A. Dissertation, London, Warburg Institute, 1991).
- (31) *Lettere d' uomini illustri* 1744. この8年後、伊達政宗が派遣した慶長遣欧使節が慶長20／元和元年（1615）秋から翌年初頭までローマに滞在し、11月3日に支倉常長から教皇パウルス5世に親書と日本の工芸品が贈られた。この教皇は4点の屏風や蒔絵の櫃を含む外交贈呈品を一族で私蔵するため、使節が出立してすぐの2月に甥シピオーネ・ボルゲーゼ枢機卿に贈与する宣言書を出した。小山真由美「花鳥葡萄蒔絵螺鈿洋櫃（慶長遣欧使節の遺品）―ヴァチカン蔵ボルゲーゼ関係文書による考證」（『國華』第119編、第2冊、平成25年）。
- (32) 彼らの往復書簡はヴェネツィアのマルチャーナ図書館、アンガンベルティーヌ図書館、パリのフランス国立図書館に収蔵。
- (33) Lhote et Joyal 1995.
- (34) Lhote が編纂した書簡の宛先は、ピニョリア、グアルド、ペーレスクの他多数 (Scipione Cobelluzzi, Antonio Querenghi, Pierre Dupuy, Jérôme Bignon, Nicolas Rigault,

Jacques Gouthière, Claude Saumaise, Jacques Gillot, Jacques Leschassier, father Jacques Sirmond, the Jesuit father Fronton du Duc, Jean Barclay, Jean Selden, Peter Paul Rubens, Hugo Grotius, Jean-Gaspard Gevaerts, William Camden) 。

(35) Jean Seznec. “Un essai de mythologie comparée au début du XVIIe siècle.”

(*Mélanges de l’ école française de Rome* 48, 1 (1931)); Lhote et Joyal 1995.

(36) S. Schrader ed. *Looking East: Rubens’ s Encounter with Asia* (Los Angeles, The J. Paul Getty Museum, 2013).

第3章 「安土山図屏風」調査研究の歴史

木戸雅寿

第1節 はじめに

天正4年(1576)1月1日、織田信長は、家督を嫡男の信忠に譲り、自らは近江国安土の地に、天下人として「天下静謐」のための拠点とすべく大城郭の建設を始めた。安土城の築城である。城は天正7年(1579)6月に天主が完成。信長はそこに移徙した。その翌年、国内で布教を進めていた宣教師アレッサンドロ・ヴァリニャーノ神父は、京で信長に出会い親交を深め安土に招待された。天正十年、安土を訪れた神父を信長は歓待し、城を案内すると共に、本国に帰る神父の手向けにと盃蘭盆会を催し、そして餞別として信長が寵愛していた「屏風」を送った。「屏風」を受け取った神父は、本国からの知らせで帰ることがかなわないと知り、彼が企画した九州大名による「遣欧天正少年使節」にその「屏風」を託した。

「屏風」はその後、4人の少年使節と共に海を渡りバチカンに届けられ、教皇グレゴリオ13世に献上され「地図の廊下」に飾られた。しかし、「屏風」は、その後忽然と姿を消し、今もその行方はわかっていない。信長が贈った「屏風」には、天主完成後の城の姿と城下の様子が描かれているという。絵師は狩野松栄(一説に永徳)で、信長が納得いくまで何度も描き直しをさせたという記録が残っている。当時の安土城の姿を忠実に描いた「屏風」は、安土城復元の切り札と言われている。これを発見することは、滋賀県の念願であり、安土城を研究している研究者、安土城、信長ファンもその発見を切望してやまない。

ここでは、歴史の彼方となった「屏風」のこれまでの探索史を紐解き研究の到達点を位置づけるものである。

第2節 「屏風」の名称について

研究史に入る前に、まず「屏風」の名称について論じておかなければならない。信長がヴァリニャーノ神父に送った「屏風」には、これまでさまざまな名称が使用されてきた。しかし、同時代資料の中には、「屏風」の固有名称は記録されていない。つまり、屏風には名前がない。現在ある呼称は、いずれも後の研究者が、その都度、思い思いに付けた名称であり、すべてその時々研究用語となる。もっとも早い段階に屏風の重要性に気づき学術論

文として展開したのは考古学者の濱田耕作⁽¹⁾である。彼はこの屏風を「安土山屏風」とした。以後、「安土城之図」屏風、「安土城図」、「安土城之図」、「安土図屏風」、「安土城図屏風」と、さまざまな名称が使用されてきた。筆者は以前、著書⁽¹⁾で「安土城」の当時の名称問題に触れたことがある。当時の記録には、「安土城」という呼称はない。城はすべて「安土山」と称されている。当時の言葉を集めた『日葡辞書』⁽²⁾にも「anzuchiyama」と標記されている。「城下町」という用語も江戸時代以降に生まれた呼称である。戦国時代には、安土山の麓にある町という意味から「山下町」(さんげちょう)とされている。さらに城を含めた都市は「安土」と呼ばれていた。したがって、もし「屏風」に安土山と安土山下町が描かれているならば、「安土山・安土山下町図屏風」とでもするのが定義的には正しいと考えているが、中心主題が「安土城」であるならば、総称して安土城が描かれている屏風として、「安土山図屏風」でよいのではないかと提唱しているところである。近年はその提唱が定着しつつあるので、ここでも屏風を「安土山図屏風」⁽³⁾として呼ぶこととする。

第 3 節 明治時代の動向

1 項 忘れ去られる歴史

歴史は、ヴァリニャーノが京での布教と安土にカザとセミナリヨを建てるために安土を訪れたことに始まる。天正8年(1580)の3月～5月、ヴァリニャーノは京で信長と面会し親交を深めた。翌年の3月、信長と本能寺で再開し、4月の京での馬揃えに呼ばれたヴァリニャーノは、14日に信長の招きで安土を訪れた。そこで教会と修道院建設が進む安土を視察した。そのまま滞在を続け、7月に安土で都地区の協議会を開催したが、本国から召喚の報せがあり日本を発つことになった。そのことを信長に知らせると、信長は、8月14日に帰国するヴァリニャーノのために孟蘭盆会を開催し、手向けとして信長が最も寵愛していた「屏風」を、「伴天連殿が予に会うためにはるばる遠方から訪ねて来て、当市に長らく滞在し、今や帰途につこうとするに当り、予の思い出となるものを提供したいと思うが、予が何にも増して気に入っているかの屏風を贈与したい。ついてはそれを実現した上で、もし気に入れば受理し、気に入らねば返却されたい」(『フロイス日本史』⁽⁴⁾)と、選別として送ることにした。

ヴァリニャーノは、とても感動し「深く感謝し、それは信長の愛好品であるから、また特に安土山に関して言葉で容易に説明しかねることを、絵画を通じ、シナ、インド、ヨーロッパなどにおいて紹介できるので、他のいかなる品よりも貴重である」(『フロイス日本史』)とし、安土を後にした。その後、ヴァリニャーノは、その「屏風」を携えて司祭会議を開催するため長崎に向かった。その道中の高槻、堺、長崎では、屏風を一目見ようとする人々に、屏風を閲覧させながら道中を進んだことが記録に記されている。ヴァリニャーノは、天正10年(1582)1月、長崎で九州の大名達の使節として少年をローマに派遣することを考えていた。そしてそれを発表し準備をしていた。その時は自らも彼等と帰国する予定であったがマカオに到着した時、本国から帰国することはないとの報せを受け、やむなく屏風を少年遣欧使節に携えて出発させた。天正10年(1582)6月2日、織田信長は、謀叛を起こした明智光秀により本能寺の変で死した。ヴァリニャーノは、屏風と共にローマに旅立った少年使節団の跡を追うつもりで滞在していたマカオでその報せを受け取った。屏風は、その3年後の天正13年(1585)4月3日、無事に教皇のもとに届けられた。少年使節は、その後、帰路に着き天正18年(1590)、豊臣秀吉による禁教の最中に帰国し迫害された。その後、この事実は禁教の江戸時代をとおして忘れ去られていた。

2 項 岩倉具視使節団の成果

あらためて、その事実が浮き彫りになるのは、明治時代になってからのことである。そのきっかけは明治天皇の勅令で組織された岩倉米欧使節団の歴訪の成果として見ることができる。歴史に見識の高かった岩倉具視は、ヨーロッパで見た文献や資料の中に、戦国時代の終わり地図でしか見たことの無い遥か遠い異郷の地を目指して旅をつづけた日本人少年達がいたことを知り感動を覚える。彼等の思いと自らの使節団としての役割を重ねて思いを深くした。戦国時代の歴史が新しい時代に蘇った瞬間であった。明治に開国し、新政府はすぐに西欧列国と日本の科学・技術の差を痛感していた。「光」輝く海外に目を向け、西欧の状況を「観」るために歴訪したのが岩倉具視(当時左大臣、帰国後太政大臣)を団長とする遣欧使節団の「観光」であった。それは天正遣欧使節を髣髴とさせるものでもあった。視察の詳細は、帰国後に久米邦武(佐賀藩士で近代日本歴史学の先駆者。帰国後使節紀行纂輯専務心得)によって、『特命全権

大使 米欧回覧実記』⁽⁵⁾としてまとめられた。特にイタリアについては、近年まとめられた『岩倉使節とイタリア』⁽⁶⁾に詳しい。それによると使節団一行は、明治4年(1871)11月に米国太平洋郵船会社の蒸気船「アメリカ」で横浜港を出発し、1年10ヶ月をかけ米欧12ヵ国を歴訪した。イタリアには約1箇月滞在しローマをはじめとする都市を訪問した。岩倉は、その中で「天正少年遣欧使節」、「慶長遣欧使節」など海外に残された日本の記録に触れた。その記録から自分たちよりも遥か以前の戦国時代に遠い国を訪問していた日本人いたことへの思いに触れ、その大切さを感じたという。このことが我が国と西欧の交通・交流史研究の初めの歩となり、その今後の研究の原動力となった。「屏風」探しの一歩は、この「天正少年使節」の歴史の再認識から始まった。使節団はイタリアに到着後の明治6年(1873)5月7日からドイツからオーストリア国境を越えイタリアのフィレンツェに入り、教会、政庁、博物館、美術館様々な施設を廻りローマに到着した。ローマでもバチカン、教皇宮を始め、すべての美術館、博物館施設を精力的に視察(紙面の都合により、どこの調査をしたかの詳細には触れない。必要に応じて記録を参照されたい)を続けた。さらにローマからナポリ、ヴェネツィアを訪れ、6月2日、ヴェネツィアを発ちスロベニア近くの都市アウリシーナに向かった。ヴェネツィアでは、特に日本に関する数々の記録が留められているフラーリ古文書館(ヴェネツィア国立古文書館)を調査し、少年使節がこの都市に訪れた時の記録を見た。セミナリーオの柱廊下の壁画には、1585年に天正遣欧少年使節が愛徳信心会を訪問したことを記念する大理石の碑「サンタ・マリア・デッラ・カリタ訪問記念碑」があった。古文書館来訪には、当時のヴェネツィア州知事代理を務めていたグリエルモ・ベルシェー⁽⁷⁾が、一行を駅に出迎え、古文書館に岩倉大使を案内した。同様にロシア訪問後一行と別れ帰国の途に就いていた木戸孝允もイタリアでほぼ同様な地を歴訪する中で、一行より先にヴェネツィア入りを果たしてこの文書群をみたことが彼の5月6日の日記⁽⁸⁾に記されている。

第4節 明治時代Ⅱ・大正時代の動向

1項 ベルシェーの調査

さて、資料を実見した岩倉具視は、ベルシェーに命じイタリアに残るその他の記録

もすべて調査させることにした。この依頼に答えベルシェーはローマ、フィレンツェ、モデナ、マントバ、ジェノバ等、各地の古文書館を探索して、多数の関係文書を収集した。この時の網羅的な調査によって天正使節が遣欧した各都市の日々の記録、屏風の献上の様子、その後の取り扱いに関する記録があることが明確化された。しかし、屏風そのものの存在については確認できていない。これらの史料はひとまず写し取られ、その成果は、明治6年（1873）9月に歴訪を終え横浜港に帰国していた岩倉のもとに送られた。ベルシェーはその後、日本領事館員として勤務し、明治8年（1875）からローマ公使館付貿易事務取扱として勤務。明治10年（1877）、その調査を研究成果としてまとめた。彼が1913年に没するまでの33年間にわたり、ペルーシェーは、日伊の橋渡しを続けた。岩倉とベルシェーの調査研究は、このあとの研究に受け継がれるべき先駆的なものであった。歴訪を終えた使節団は、新政府の樹立のため各分野でこれらの成果を生かすことを始める。一方で、主体である日本国体の基礎となる歴史を整理するため史料整理が始められた。その中で「遣欧天正少年使節」と「安土山図屏風」にかかわる史料の調査と整理が続けられた。また、それが下地となり後の研究が花開いている。ベルシェーの調査研究は、明治10年（1877）に解題を附して『日本使節考』^{（9）}として出版された。ベルシェーは、さらに続刊としてフェラーラで収集した関係資料を、明治17年（1884）に次女の結婚を記念として刊行。ラゴッチによりイタリアにある天正及び慶長の遣欧使節に関する未刊行資料が「1585年の天正遣欧使節のこと」としてヴェネツィアで刊行された。これらの史料はのちの史誌編纂に生かされることになる。それを探るにはまず、明治政府の修史事業を紐解かなければならない。

2項 明治政府の修史事業

政府は自国の歴史をまとめるため、明治2年（1869）に修史事業に着手する。「修史の詔」を発し『六国史』を継ぐ正史編纂事業を開始した。明治9年（1876）、修史局の編纂による『明治史要』を刊行。しかし、財政難のため明治10年（1877）に組織は廃止となる。代わって太政官修史館が設置され『大日本史』を準勅撰史書と定め編纂対象を南北朝以降ときめて再スタートが切られた。これには漢学者・歴史学者と使節団の久米邦武がかかわった。しかし、修史館内部で歴史的方法論の対立

があり、結果、明治14年（1881）に機構改革を行い修史事業は久米等を中心として行われることになった。明治15年（1882）、漢文体編年修史『大日本編年史』の編纂事業が開始されたが国学・水戸学系歴史家と対立した修史館組織は帝国大学に移管され同大学の史誌編纂掛となる。明治23年（1892）、雑誌の久米論文の内容が問題となり久米は筆禍事件により職を辞する。このことで明治24年（1893）、井上毅文部大臣は『大日本編年史』編纂事業を中止し史誌編纂掛を廃止する。しかし、明治26年（1893）、星野恒がこの修史事業を受け継ぎ「天正遣欧少年使節」の記録をまとめた。これ以降、国史編纂はやめ史料編纂を行うことになり、正史書編纂は塙保己一の流れをくむ史料編纂掛が引き継ぎ、明治28年（1895）に帝国大学に史料編纂所が設置された。このようにして岩倉使節団の成果と史料は、明治政府の修史事業に取り込まれていった。これらの史料があらためて日の目を見るのは、明治28年（1895）に帝国大学に設置された史料編纂掛を舞台とし明治34年（1901）に始まった『大日本史料』の刊行である。当時、帝国大学の史学教官は、歴史学者坪井九馬三であった。坪井は在学中から文科大学で史学(欧米史)の講義を29歳でつとめるという逸材であり、その教え子のなかに、後に数々の編纂事業を成し遂げ、その後のキーマンとなる村上直次郎がいた。

3 項 村上直次郎による調査と成果

村上直次郎による外交資料採訪が、次の研究史の要となる。村上は明治28年（1895）に帝国大学文科史学科を卒業。同年帝国大学大学院入学し坪井とルートヴィヒ・リースに師事し歴史学ぶ。7ヵ国語という素晴らしい語学力に支えられ、西欧交渉史に傾倒しその道に進んだ。このあたりの村上については業績集⁽¹⁰⁾に詳しい。それによると明治30年（1897）東京帝国大学大学院を退学し、明治32年（1899）5月から文部省に入り南洋語学及び同地理歴史学研究として3年間、西・伊・蘭3ヶ国へ留学した。留学中の史料採訪と研究の経過は、自らの欧州留学中の日記と「外交資料採訪録」⁽¹¹⁾として知ることができる。在欧3年半中に、ポルトガル、イタリア、ロンドン、イスパニア、オランダ、パリを訪れ精力的に日欧の交流・交通史にかかる文献の調査に当たった。

4 項 エボラ屏風の発見

特にポルトガルのエボラ滞在中に公立図書館の目録に毀れた日本屏風一双のことが記されていたことを発見。後に「エボラ屏風」と称される資料を発見されている。これが「安土山図屏風」ではないかと思い調査し報告⁽¹²⁾した。エボラは一州の首都にして大司教の居所であった。当時の大司教は少年使節の往復の立ち寄り先として彼等を歓待している。村上は「外交資料は右の如く少ないので大いに失望したが、ここに一つ面白い発見をした、それは同館に金屏風が破れてした下張りの反故を現したのがあったが、この反故の中には、日本紙にラテン文やポルトガル文を認めたものも見えるので、許可を得て段々剥いで見ると、キリスト教書類の原文と訳文を対照したのや、フロイスのポルトガル文書状であった。屏風はもと何枚折幾双であったか知れないが、今は五枚だけ残っていて右の外に教書の写しや、安威五左衛門という人の往復文書、キリシタンの書簡等が数通張ってあった。何れも史料として大きな価値があるのではないが、いかにも意外な仕方で、史料が保存されてあるのは注意すべきである」とし、裏張りの日本文書を写し取った。「エヴォラ図書館の金屏風が破損して不用」となった屏風は、「骨が露出している屏風5片で、紫絹に桐の紋の縫出してある縁があった」「離れ離れの五扇で、一扇の大きさは175cmに62cm」であったと記されている。本紙の記述はなく絵はすでに失われていた。当時の屏風の扱いと保存状況を暗示するものであった。この屏風については後にいくつかの更に詳しい研究⁽¹³⁾がなされている。

5 項 大日本史料の編纂

このように村上による各地方の文書館や図書館で筆写された資料は膨大な量であり、多数のノートブックに精緻な筆跡で丹念に写し取られたといわれている。明治期の村上による精力的な資料の採録調査は大きな業績である。村上の仕事を知る人々は、網羅的な村上の仕事ぶりを見て、存在していれば必ず発見されるであろうと「安土山図屏風」の存在を否定的にとらえる研究者が多い。村上の後塵を掃く人々は、師が歩いた後は焼け野原であったと言い村上の悉皆調査は徹底されたものであったようである。残念ながら昭和以後の調査はこれらの明治の成果をしっかりと整理し受け止めた上でおこなわれていないように感じる。繰り返し同じ場所を違う時代の違う者が調査に入り同じ結果を得ていることは学問が体系的に整理できていない表れではないで

あろうか。村上のこれらの記録の多くは、村上の調査資料は、数千ページに及ぶタイプ打ちの資料として残された。それが結実したものが、後に『大日本史料』⁽¹⁴⁾をはじめ様々に刊行⁽¹⁵⁾された。このように村上はベルシェーの調査・研究が既にあったにもかかわらず、一つずつ足で確かめて精力的に原典に当たったのである。

明治35年(1902)に帰国した村上は、明治36年(1903)1月から東京帝国大学史料編纂員兼職嘱託を命じられ西欧交渉史を専門とした研究に励んだ。明治38年(1905)には史料編纂官に昇格し以後様々な大学で教鞭をとるかたわら、史料編纂官として生涯をかけて活躍した。村上の調査を契機にイタリアでもボンコンパニ・ルドヴィジが、遣欧使節に関する文書や当時の評判記などを集めて明治39年(1906)に刊行した。村上は明治・大正・昭和と生き抜き最後は上智大学学長として教鞭を執り98歳まで生き、日欧交渉史のパイオニアとして学会に君臨し研究をリードし数多くの業績を遺した。しかしながら屏風の直接的な資料を見出すことはできていない。

第5節 昭和時代の動向 I

1 項 考古学者濱田青陵の業績

昭和初期から戦前にかけての研究としては、村上の研究を引き継ぐ形で進められたが、各々の研究者が独自の動きの中で、日欧関係の新たな日欧関係資料を求めてあらためて採訪事業に着手している。その中でも、いち早く「安土山図屏風」の重要性に気が付いた考古学者がいた。それが濱田青陵である。濱田は昭和6年(1931)4月に『天正遣欧少年使節』⁽¹⁶⁾を著し当時知られていた資料をまとめ直した。その中で「史料に関しては村上博士が詳しく述べられてある」とし氏の調査履歴を挙げられた。さらに濱田は天正遣欧使節が献上した屏風に着目し、その年の12月に「安土山図屏風について」⁽¹⁷⁾を著した。その中で「織田信長の安土城の圖を書いた屏に至っては、未だ世に傳わってゐることを聞かない」とし、「西欧の文献中に発見し得る」として、1585年の『羅馬報知』の「極大きくて誠に薄い木の皮に、日本の主要なる一都の絵を書いて、それには澤山の大きな建築が描いてある」として史学雑誌の村上博士論文十四編三をあげた。また、『ベナッキの談話』(ベルシェー日本使節考第三

号史料)に「信長 Nobunaga と称する日本の主都を描いた高二ブラッチャ(約六尺)・長四・五ブラッチャ(約十二乃至十五尺)の書」、またバルトーリ『耶蘇会史』日本部の「そのうち最も善きものは屏風 Beobi と呼ばれる装飾家具の二つであつた。其の一には新しい都市と、他の一つには安土山 Anzuchiyama の不落の城を筆を以て描いたものであつた」、屏風はグレゴリオ 13 世の宮殿に創始された「地誌廊」に装置されたことなど基本文献をあげて整理し「桃山の障壁書、又た其の特殊の一類たる南蛮屏風の考察にも、決して忘れることの出来ない作品であると思ふ」と結ばれた。

2 項 その他の調査

岡本良知⁽¹⁸⁾は、時を同じくして、昭和4年(1929)9月からポルトガルを訪ね、翌年その記録をまとめている。次に幸田露伴の弟幸田成友⁽¹⁹⁾の業績がある。幸田は東京大学文学部史学科を卒業後、商業史、都市史から日欧交通史に興味を持ち、昭和9年(1934)にイタリアに採録調査に出かけ調査した。

第6節 昭和時代の動向Ⅱ

1 項 交通・交流史の研究の進展

昭和時代Ⅰの屏風探しは、明治からの流れをくむ西欧との交通・交流史という観点が主であつた。この流れは文献史学を中心に第二次大戦後も引き続きその動きがみられる。松田毅一⁽²⁰⁾は昭和34・4年(1959・60)に東欧に採録に出かけた。また、その直後に土井忠生⁽²¹⁾もポルトガルに採録に出かけている。その他、広田孝一⁽²²⁾、泉井久之助⁽²³⁾、岡田章夫⁽²⁴⁾、結城了悟⁽²⁵⁾等がヨーロッパを訪れ調査研究を続けている。いずれにしても、これら各々の連携しない動きの中での西欧における文献調査は、すべて村上が歩んだ跡を追跡するだけの調査であつたと言われ、それを目の当たりにし失望し帰国したことが告げられている。

第7節 昭和時代の動向Ⅲ

1 項 天主復元と屏風探し

さて、これとは別の動きとして安土城天主復元のための資料として屏風を探すということが始まった。天主を復元したいという動き⁽²⁶⁾は戦前にスタートしている。大

正から昭和初期にかけて、建築家の土屋純一、古川重春が文献を基に安土城天主の復元を試みていた⁽²⁷⁾。しかし、当時は天主台、本丸は埋もれたままで構造がよくわかっていなかった。そのため、復元には先ず天主台の基礎構造を知ることであると考え、滋賀県は昭和15・16年に天守台・本丸御殿跡の発掘調査⁽²⁷⁾を実施した。しかし、その直後に第二次大戦争となり、その後の事業は進展しなかった。戦後、昭和30年（1955）になって西武の堤康次郎が城戸久（当時名古屋工業大学）の案でコンクリート模擬天守を建てる計画を進めようとしていた。幸いにもこの計画は国により現状変更の許可が下りなかったため実現しなかった。その後、江戸後期の加賀藩の大工の家から「天守指図」という新しい資料を発見し、これを安土城の記録と見なして現地測量と照合し、昭和51年（1976）に発表された内藤昌氏⁽²⁸⁾案が世に出たことで、これが最新の復元案として決定的な最終案としてもてはやされた。それを受ける形で滋賀県で復元の話が再燃する。

2 項 武村知事(当時)の提言

内藤案を有力候補として復元議論が決着したと感じた時の滋賀県知事武村正義（第8～10代）は、昭和54年7月、大坂で開催された第一回近畿サミットで「近畿の復権」というテーマで各府県知事により「80年代の活力ある近畿づくり」を議論した。そこで武村は、「近畿はまさに日本人の心のふるさとであり、この地は文化財の宝庫でもある。歴史の中で破壊された文化遺産を今日に生かすために文化的公共投資が必要ではないか」とし、「本物の安土城や羅城門を復元することにより新しい近畿の創造を考えてはどうか」と述べた⁽²⁹⁾。そして、8月から知事の意をうけ県文化財保護課ではあらためて天主復元の検討を開始した。現地での天主復元については、既に昭和33年に国会で議論され、特別史跡安土城では余ほど確かな資料がない限り文化庁は許可しないとされていたが、その可能性の調査を実施することにした。

3 項 県による屏風探しのスタート

昭和55年7月からまず有識者の意見を求めた。当時復元案を発表し話題となっていた内藤昌（当時名古屋工業大学）のもとを訪れ事情聴取した。内藤は「直ちに復元することは困難と思われる。文化財サイドの理解が必要。屏風を確認する必要がある。技術的な検討段階を踏んで進める必要がある。歴史的事実と技術的側面を追及していくことが良い。10

人の意見の平均ではだめ。作成委員会の設置が必要。現行の建築基準を満たすことが必要。復元は国際的に考える必要がある。知事からの要望があれば受ける」との意見を示した。これに対し、当時内藤が示した歴史資料に疑問があるとして案に否定的立場であり対案⁽³⁰⁾を提示していた宮上茂隆(当時東京大学)は、「復元が良いか史跡のままだが良いがどちらともいえない。安土城は存続期間が短く記録が残ることは困難。世界中を探しても資料は見つからないであろう。内藤案の根拠とする天主指図は評価が間違っているため信頼できない」と意見をした。さらに、11月、当時城郭建築の権威と言われた藤岡通夫(東京工業大学)を訪れ相談した。藤岡は「復元は何のためなのか目的意識をはっきりとすべき。復元を解決するには信長がローマに送った「屏風」を探し見つけることが必要。外部よりも内部を復元しなければ価値は半減する。復元するなら木造に限るべき。工法的には可能であるが法との関係が問題である」等の意見をした。この発言を受けた県は、文化庁を説得し、いずれかの復元案に信憑性を持たせるためには天正遣欧使節がローマに届けた「安土山図屏風」の発見が不可欠であることを悟り、発見が復元の鍵を握ると考え新たな行動に移った。それが「屏風」探しであった。

4 項 屏風探索の行動を開始する

翌、昭和56年2月、たまたま偶然にローマ法王ヨハネ・パウロ二世が来日していることを知った県は、「屏風」探しをバチカンに依頼することを考えた。しかし、そう容易い糸口はなく手足も出ないとことを悟った。これら有識者のコメントを知事に報告した。

この年は安土城400年目にあたり安土町では、「織田信長400年祭」に盛り上がっていた。12月の県議会では、「近江風土記の丘整備と模型安土城設置に関する請願」が北川弥助議長(当時)から提案され可決され、実現に県当局の積極的な援助を請願するされた。これらの盛り上がりを背景にし、復元には確固たる資料が必要であると認識し、「屏風」を本格的に探索していくこと以外に復元への道はないと考え探索のための探索が始められた。昭和57年1月、(株)そごう百貨店(以下「そごう」)で、「ヴァチカン展」が開催されたのを受け、バチカンとの接触を模索していた県は、そこを媒介することを考え、竹中工務店と「そごう」の関係者と面会し天主の復元を考えていること伝え、協力を依頼した。「そごう」は、バチカンを探索するのであれば、バチカン市国には資料や美術品を収蔵している博物館、美術館、図書館、古文書館、収蔵庫、礼拝堂、聖堂など多数の施設があること、おのおの管

理者や区分が違うので市国での調査や訪問には、日本政府からローマ法王庁大使を通じ市国に連絡し、バチカン大使館およびバチカン市国、日本大使館に公式に調査依頼する必要があることを教えた。それにはまず事前に日本カトリック教会の大司教(当時白柳誠一)に判断を仰ぐ必要があることを教えた。

2月、県は「そごう」とともに大司教に面会した。司教は復元についての協力を惜しまないこと、現地調査について法王にお願いすること、そのために県なり町なりの協力要請の依頼を出して欲しいこと等を示された。ローマ教皇庁へは大使(当時マリオ・ピオ・ガスパリ)を通じ市国へ連絡すること、あらかじめ資料リスト等で調査資料の有無のあたりをつけること、県から公文書でヴァチカン大使館及びヴァチカン市国大使館にあらかじめ調査依頼を行うことなど細かな指示がなされた。昭和57年12月議会では、採択された請願を実現する為に、正確な復元図の作成をするためとして、「安土城郭検討委員会」を設置することが決定された。あわせて、委員会の検討のための参考資料とするため、「屏風」を探す事業を実施していくことあわせて決定した。そして、知事名で「そごう」、「竹中工務店」、「日本カトリック教会」に探索依頼文が出された。

5 項 調査検討委員会の設置

昭和58年4月1日、「我が国の城郭史に画期的な位置を占める特別史跡安土城跡について、その天守閣等の復元を目的として、資料等の収集、調査、検討および復元方法の調査、研究、検討を行う」ためとして、「城郭調査検討委員会」が設置された。構成メンバーは、中世城郭研究者の村田修三(当時奈良女子大学)、城郭建築史の藤岡通夫(当時東京工大)、西欧交流史の松田毅一(当時京都外大)、白柳誠一(日本カトリック教会大司教)、キリスト研究者のH・チースリク(当時上智大学)、城郭研究家の井上宗和(日本城郭協会)で、任期は昭和57年4月1日から昭和58年3月31日であった。4月～8月に各委員、関係者から聞き取り調査が開始され、屏風の存在の可能性、探索範囲、ヴァチカンへのアプローチの方法などが検討された。10月、大司教はローマ法王庁に宮殿内の施設の調査を依頼することを約束。白柳大司教から知事へバチカン関係の施設での屏風探しの許可が得られたことを知らされる。11月、ローマ法王庁のウォルター・ペルセガッティ氏が、ヴァチカン博物館での調査を終え、教皇庁立図書館、秘密文書庫、ヴァチカン宮内局を調査したが成果がなかったことを知らせてきた。この時、白柳大司教は「ヴァチカン宮殿には過去数百

年の間世界各国からの献上品があり、その数は何万にも達しているかもしれない。一ヶ月でそう簡単に探せるものではない」とした。また、12月にはチースリック神父が「当時の博物館は倉庫のようなもので現在のような展示施設となったもので現在のような展示施設となったのは約100年前である。現在までに安土屏風を調査した学者があるが、見当たっていない。図書館、博物館等の常識的な場所の調査だけでは無理なのではないか。所在する可能性として、ローマ教皇が贈物あるいは土産として贈る場合。当時の教皇グレゴリオ13世の出身地の貴族に送られたこと、当時のローマ市に贈られた可能性。イタリア国立施設に保管されているなどの可能性を指摘した。12月、1回目の検討委員会が開催されこれらのことが報告された。さらに屏風絵がバチカンにないとすれば当時の教皇グレゴリオ13世の甥に当たるソリア侯爵ボンコンパニ(当時は教皇の秘書、執事的な事務をその一族で処理し、教皇と一体となって移動)が、教皇の退位後に持ち帰った可能性があるので、同侯爵の後裔がどこにいるかを探さなければならないとした。末裔の所在はイタリア日本大使館、駐ローマ大使館に依頼すればどうか。ボンコンパニの記録、1586年パリ発行の「日本の使節」の記録、ウルバノ・モンティの日記の調査、ルイス・フロイスの記録の中のメスキータ師の手紙の調査などバチカン関係は、日本カトリック教会白柳大司教にすること、あわせて、イタリアのマスコミを通じて県が信長の屏風絵を探し求めていることをPRすること」を提案された。委員会としては、屏風絵の存在の可能性は充分あるとし、バチカンを通じグレゴリオ13世の家族に渡された可能性、ナポレオンがローマに侵入した時、バチカンから持ち出されてしまった可能性、グレゴリオ13世の子孫の手に渡っていないか、遺品を整理した甥のボンコンパニ・ソリヤ公爵に渡った可能性などが指摘された。日本から調べに行く前にイタリア、ローマで屏風絵を探していることを現地の新聞に発表し、イタリアの報道関係の協力を得ることがあげられた。

6 項 現地調査の実施

そして、現地調査については、昭和58年1月から現地調査員に委託することとした。昭、また、県職員を現地に派遣することも決定され、知事から外務省東亜局に依頼された。その際、5月に県と安土町で役割分担がなされ、県はバチカンの文書調査、町はイタリア博物館、図書館等および安土城屏風献上当時の法王秘書の末裔に対しての調査を行うこととなった。そして10月から本格的な調査が開始された。

まず、ヴァチカン宮殿内の調査が了承された。それを NHK、毎日、読売放送との連携で RAI(イタリア国営放送)の報道に取り上げてもらうことにした。昭和59年1月1日、「どこへ消えた幻の屏風絵 安土城解明のカギを秘めて」として滋賀報知新聞にこれらの経緯経過が報道された。「復元となると問題は山積みであった。城跡は特別史跡のため文化庁の許可がいるが、文化庁はよほど確かな資料がない限り許可はしないとの判断」「安土城天主の原形は資料がなくわからない。さらには学説がいくつにも分かれている。学者の復元図が幾通りあっても安土城の姿は一つ。真実の一つのはず」「この問題を解決するためには、信長がローマに贈った屏風絵を発見する以外に手がないという結論」「各方面の伝手をたどり、屏風の行方をたどるが一月くらいでそう簡単に探せるものではないことがわかり、調査は暗礁に乗り上げる」と。しかし、県では1月以降も精力的な調査を続けることとした。そして、昭和59年2月20日から27日まで職員(当時文化担当審議員、文化財保護課長、安土町長)を現地に派遣し、ローマ法王庁、イタリア大使館及びヴァチカン大使館を表敬訪問することを決定した。しかし、成果は全く得られなかった。

7 項 現地調査の継続

昭和59年度も引き続き現地調査を実施することになり予算が計上され、9月～11月にローマ在住大学岩原親典(東京外国語大学美術史)に調査を委託し、ボンコンパニ家および子孫の調査の実施が提案された。調査は、昭和60年1月から3月经費500,000円で委託され実施された。昭和60年4月、岩原からレポートが到着し、その結果が報告された。調査結果は以下のとおりであった。ボンコンパニ家の出身であるローマ法王グレゴリオ13世のボンコンパニ・ルドヴィージ家、フランチェスコ・ボンコンパーニ・ルドヴィージの資料を調査。直系の子孫の資料には屏風の記事が無い。ウーゴ・ボンコンパーニ・ルドヴィージ(ボンコンパーニ家の子孫)にも屏風の資料はなかったとし、これからの調査として①ボンコンパーニ・ルドヴィージ家の末裔がローマ在住の話を聞く、②イエズス会の内部についての検討などを挙げた。しかし、今後の見とおしとして、結論は大変困難であるとの結果を出した。さらに9月から追加の調査を行うこととして75万円の費用が用意され、①屏風を所持していると思われるボンコンパニ家、②イエズス会に対する屏風の所在に関する情報の収集③ローマ市立図書館のボンコンパニ家の文書調査を昭和61年3月までの委託で依頼することとした。調査は3月中にはおわらず、引き続き継続され昭和61年11月にその結果

がもたらされた。結果は、ボンコンパー二家には存在しないという結論だけであった。残る希望はイエズス会としたが、今後の見通しはやはり大変険しいとの報告を受ける。

8 項 屏風探しの事業の頓挫と調査整備事業

そのことを受けて、昭和61年12月15日付け日刊滋賀新聞「それでも幻の`安土城屏風`を求めて」で報道がなされ、「`安土城復元`岐路に立つ！ 来年度予算の調査費で議論として、事業の費用対効果が議論されることになったとされた。安土城復元は、地元の人たちの夢であり、再三にわたって復元運動が展開された。しかし、実現の望みは殆どなかった。知事が提言し、県が職員をローマに派遣して屏風を求めて東奔西走したが成果は得られなかった。屏風さがしの予算は「地域博物館整備管理費（城郭検討調査費）」の名目で支出しているが費用対効果に課題があるとし議会では新年度予算を認めない」という結果となった。そしてその後の調査は中止となり、海外調査は安土町に任せることになり県はてを引いて天主復元をあきらめることとなった。

滋賀県では昭和の屏風探しの結果を文化庁に報告すると共に、屏風を探す事よりも大切なこととして、国民共有の財産である特別史跡安土城を将来に向けて継承していくことではないのかという指導を受けて、昭和63年からはこれらの予算を復元計画以前の課題として、まずは特別史跡安土城跡の調査整備に振り向けることとして城全体の再調査と整備を行い天主台の再調査などを含めたあらたな資料を得ることに方向転換した。

そして、平成元年から20年計画で調査整備を行うことを決定し、平成5年に安土城郭調査研究所を設置し事業を進めた。屏風探しは、結果として平成元年からの平成20年の調査整備を実施につながったのである。しかしながら、県のこの事業も第52・53代の知事である嘉田嘉子が打ち出した、「もったいない」をスローガンとした財政構造改革プログラム(H18)により、調査整備事業は縮小され二期目20年の調査整備は中止となり調査研究所も廃止となった。

第8節 平成時代の動向 I

1 項 旧安土町による屏風探し

旧安土町では安土城天主復元推進を継続することとし、県が屏風探しを中止して以降は、屏風探しは町の役割分担として行うこととなった。平成16年（2004）年

9月、在イタリア大使館文化担当に手紙で協力を依頼し、在バチカン日本大使館の紹介を受ける。そこからバチカン美術館美術局長に問い合わせ、さらにバチカン美術館館長へ協力依頼をするが保存されていないとの回答を得て終わる。それ以後も大使館を伝い様々な施設、バチカン白柳枢機卿などに手紙を送付するがこれら施設はすでに明治以来、昭和の県も含めて幾度も調査が行われている場所であり進展は全くなかった。その結果を受け、カトリック教徒教区司教から直接ローマ法王に謁見する必要がある事を示唆される。11月23日に法王を訪問することで町長が渡航することに決定し11月18日にミラノに向かって出航。姉妹都市マントヴァ、ヴェネツィア、バチカン美術館、図書館、ボンコンパー二家、ナポリ都市サミットに出席し帰国。結局、謁見することは叶わずバチカンのサンピエトロ広場で行われる教皇ベネディクト16世(当時)の祈りの場で持参したミニチュア屏風を見せお願いをただけに終わった。

2 項 旧安土町による調査団の設置

調査団の派遣が必要と考えた町では、平成19年(2007)1月11日～2月11日(30日間)に「安土町屏風絵探索業務委託」⁽³¹⁾として調査団長に当時遣欧使節に関する小説を発刊し話題を呼んでいた若桑みどり⁽³²⁾(当時千葉大学教授)を任命してパオラ・ガヴァリエレ(当時国際交流員)、新保淳乃(当時千葉大学講師)をローマに派遣し、バチカン関係施設すべての収蔵庫を点検し、教皇献上品が収納されている可能性の高い教皇庁内部倉庫とその記録、屏風が教皇庁内に確実にあった時期と場所を確定させる調査、その時の教皇が個人的に使用していたさまざまな倉庫、何らかの理由である時点で教皇庁の外に出たという二つの仮設(教皇個人の倉庫、別荘、外交上野贈り物として他国に流出した可能性)の調査、フィリップス・フォン・ウィングの素描に関する調査、地図の画廊の修復履歴の調査などを実施した。しかし、屏風を派遣することはできなかった。この時の調査成果および内容については報告されている通りである。唯一の成果は、画廊に屏風があった可能性のある時期を【1592年～1750年】と特定したことである。最後に他貴族や他国への持ち出しを確認することと調査の方向性とすることを確認したところで、調査は時間切れとなり、以後の調査は、町議会での費用対効果の議論と団長である若桑氏の逝去などで中止となった。

第9節 平成時代の動向Ⅱ

平成時代は3つの流れで押さえることができる。ひとつは、近年の学術研究の動向である。近年は、美術史的な視点での屏風研究がなされている傾向が強い。榊原悟⁽³³⁾は、使節が献上した他の品や他の屏風にも興味を示している。吉田富子、吉田瑞穂⁽³⁴⁾は、これまでの屏風研究を整理し、美術史的な観点から、濱田、岡本の屏風の数え方に疑問を呈し、屏風は二曲一隻であるとし、作者も狩野永徳か松栄かは不明であることなど屏風の位置づけ、信長の意識、西欧における屏風の影響など美術史的な観点から新たな問題提起し新たな視点を与えている。さらに吉田富子⁽³⁵⁾は天正遣欧使節と出会った2人のフランス大使について論究されフランスへの展開を想定している。竹本千鶴⁽³⁶⁾は、近年最も資料として有力視されている「ウインゲの素描」の全貌を明らかにした。そのウインゲの版画が乗せられている本の日本語版が刊行され、その中でピニョリと『神々の姿』増補版におけるウインゲの素描が取り扱われ、その中で大橋喜之⁽³⁷⁾が経緯と屏風の位置づけを整理した。最も新しい天正遣欧少年使節の著としては伊川健二⁽³⁸⁾のものがある。実際の調査としては、若桑みどりの遺志を継ぎ調査の継続性の必要を感じていた近江八幡市による調査団のメンバーであったパオラ・カヴァリエレと新保淳乃等によるNPOとしての調査の継続である。スポンサーとなる写真家杉本博司、協力者となる橋本麻里⁽³⁹⁾（永青文庫副館長）、太田智子（近世イタリア美術研究者）、マーク・アードマン（メルボルン大学）、アントン・シュバイツァー（九州学院大学）、山本英男（前東京国立博物館学芸課長）、エリアン・ルー（ローマ大学）等の面々とNPO「杉本博司と探る安土城図屏風探索プロジェクト」を立ち上げ、平成30年（2018）からクラウド・ファンディングを毎年募り調査を開始した。現在もこの調査は鋭意実施され続けている。プロジェクトの経緯と成果については2章に譲りたい。さらに、三日月現知事の令和元年1月1日の新聞報道がスタートとなった天主復元の検討にはじまった「幻の安土城復元プロジェクト」における屏風探索事業である。これについての詳細は1章に委ねる。

第10節 まとめ

本章のまとめとして次のことを提言したい。各時代、個々の研究者による調査が同

じ場所で繰り替えしおこなわれていることに気が付く。バチカン市国がナーバス(聞くところによると、一般人が気軽にあるか無いかの問い合わせや、調査したいなどのメールを直接送ったりしていると聞く)になることがとても理解できる。これは過去の調査履歴の整理ができていないことに起因していると考ええる。できる物かどうかは現時点で判断が付きかねるが、誰がいつどここの施設の何を調査したのか、未調査はこの何なのかのデータベースが必要ではないかと感じる場所である。次の世代がまた同じことを繰り返さないためにも必要なことと感じる。

注

- (1) 濱田耕作「安土山屏風について」『仏教美術』(18) 仏教美術社 1931
- (2) 土井忠生・森川武・長南實 翻訳『邦訳日葡辞書』岩波書店 1995
- (3) 木戸雅寿『天下布武の城(改訂版)』新泉社 2025
- (4) 松田毅一・川崎桃太郎訳『フロイス日本史』5 五畿内篇Ⅲ 中央公論社 1978
- (5) 久米邦武『特命全権大使 米欧回覧実記』4 普及版ヨーロッパ大陸編中慶応義塾大学出版会 2008
- (6) 岩倉翔子編『岩倉使節とイタリア』1997 京都大学学術出版会
- (7) 石井元章「エドワード・モースと 1881 年ヴェネツィア万国地理会議」東京大学大学院人文社会系研究科。
- (8) 木戸孝允『木戸孝允日記』日本史籍協会編 昭和 7・8 年
- (9) ベルシェー「日本使節考」・「古の時代のイタリアにおける日本使節：歴史的覚書と関連資料」『ヴェネト・アーカイブ』ベネチア王立科学・文学・芸術研究所紀要 第 13・14 号 1877
- (10) 『キリシタン研究』第十二輯 吉川弘文館 1967
- (11) 村上直次郎「外交史料採録訪録」(一)～(完)『歴史地理』吉川弘文館 1899-1977
- (12) 村上直次郎「エボラの司教と金屏風」『日葡交通論叢』葡萄牙叢書 4 協和書房 1943
- (13) 幸田成友『史話東と西』中央公論社 1940、岡本良知「見物の記」リスボアの条『ポルトガルを訪ねる』日葡教会 1930、海老沢有道・松田毅一『エヴォラ新出屏風文書の研究』ナツメ社 1961、土井忠生「エヴォラへの旅」『吉利支丹文献考』三省堂 1963、松田毅一

- 『渡欧日記 昭和三十四・五年』同朋舎 1977、中村貢「豊臣家臣団とキリシタン・リスボンの日本屏風を中心に」『史淵』124号 1987、「リスボン所在日本関係資料調査」『東京史料編纂所年報第39号』2004、藪田實「屏風」とヨーロッパ：グラーツ・ローマ・エヴォラ・ライデン」『なにわ・大阪文化遺産学研究センター2008』関西大学なにわ・大阪文化遺産学研究センター、木戸雅寿「『エヴォラ屏風』の謎—『安土山図屏風をめぐって』—『淡海文化財論叢』第十二輯 淡海文化財論叢刊行会 2020
- (14) 東京大学史料編纂所編『大日本史料 天正遣欧少年使節関係史料第1別巻之2』、『大日本史料 天正遣欧使節関係史料第2』 1959
- (15) 村上直次郎訳『耶蘇会日本通史』「異国叢書」聚芳閣 1927・28、村上直次郎訳『異国往還書翰集・増訂異国日記抄』「異国叢書」駿南社 1929、村上直次郎訳『イエズス会士日本通信：耶蘇会士日本通信豊後・下編、上』「異国叢書」続第1輯第1・2巻 帝国教育会出版部 1936、村上直次郎訳『耶蘇会の日本年報』第1・2輯 拓文堂 1943・4、村上直次郎訳・渡邊世祐註『耶蘇会士日本通信上・下巻』異国叢書第1・2巻 雄松堂出版 1966、村上直次郎約・柳谷武夫編輯『イエズス会日本通信上・下』、『イエズス会日本年報上・下』新異国叢書3・4巻 雄松堂書店 1968、『外国人の見た日本第1』筑摩書房 1962、『日本見聞録』「異国叢書」雄松堂 1975、村上直次郎訳『異国往復書翰集』異国叢書第11巻 雄松堂書店 2005 など。
- (16) 濱田青陵『天正遣欧使節記』岩波書店 1931
- (17) (1)
- (18) 岡本良知訳・註ルイス・フロイス原著『九州三候遣欧使節行記』東洋堂 1941、岡本良知『南蛮屏風考』昭森社 1955、岡本良知・高見沢忠雄『南蛮屏風』鹿島研究所出版会 1970、岡本良知『十六世紀日欧交通史の研究』原書房 1974、『キリシタン研究』第20輯 吉川弘文館 1980、
- (19) 幸田成友『東西交渉史論』富山書房 1939、幸田成友著作集第3・4巻(日欧交通史篇1・2)中央公論社 1972
- (20) 『在南欧日本関係文書採訪録』養徳社 1964、『キリシタン研究』第9輯 吉川弘文館 1964、松田毅一『天正少年使節』角川書店 1965、『近世初期日本関係南蛮資料の研究』風間書房 1967、『渡欧日記 昭和三十四・五年』1982、松田毅一監訳『十六・七世紀イエズス会日本

報告書』Ⅰ期Ⅰ集 同朋舎 1987

- (21) 土井忠生『吉利切支丹文献考』三省堂 1962、『キリシタン研究』第20輯吉川弘文館 1980
- (22) 広田孝一『天正少年使節記』東洋堂 1941
- (23) デ・サンデ著・泉井久之助共訳『天正遣欧少年使節記』「新異国叢書」5巻 雄松堂書店 1969
- (24) 岡田章生『十六世紀日欧交通史の研究』六甲書房 1970、「南蛮寺と屏風」『岡田章雄著作集』Ⅱ 同朋舎 1981
- (25) 結城了悟『新史料天正少年使節』キリシタン研究二十九輯 南窓社 1990
- (26) 木戸雅寿「安土城天主研究史を考えるー考古学の見地からー」『考古学論究ー小笠原好彦先生退任記念論集ー』真陽社 2007、「安土城「天主」の復元は、どこまで可能なのか」『信長研究の最前線』洋泉社 2018
- (27) 『滋賀県史蹟調査報告書』第十一冊(安土城址) 滋賀県 1941
- (28) 内藤昌「安土城の研究上・下」『国華』987・988 1976、『復元安土城』講談社選書メチエ 1994
- (29) 「どこへ消えた幻の屏風絵」『滋賀報知新聞』昭和59年(1984)1月1日
- (30) 宮上茂隆「安土城天主の復元とその資料について」『国華』988・999 1976
- (31) 「安土町屏風絵探索プロジェクト学術調査報告書」『平成18年度調査報告書』安土町 2009
- (32) 若桑みどり『クアトロ・ラガツィー天正少年使節と世界帝国』集英社 2003
- (33) 榊原悟「贈り物にされた屏風たち」『美の架け橋』2002
- (34) 吉田富子、吉田瑞穂「信長の「安土山図屏風」にまつわる伝説」『神話・象徴・文学』2 楽浪書院 2002
- (35) 吉田富子「安土山屏風」拾遺『神話・象徴・言語』比較神話学研究組織 GRMC 楽瑯書院 2008
- (36) 竹本千鶴「「安土図屏風」を描き遺したフランドル人」『日蘭学会誌』2010
- (37) 大橋喜之「改題 ロレンツォ・ピニョリ版変身する書物 I 永徳の「安土山図屏風」について分かったこと分らないこと」『西欧古代神話図章大鑑[続編]』八坂書房 2014
- (38) 伊川健二『世界史の中の天正遣欧使節』吉川弘文館 2017
- (39) 橋本麻里「安土山図屏風」、「幻の安土山図屏風を探せ!」『芸術新潮』2018

第4章 「安土山図屏風」 関連資料および解説

松 下 浩

フロイス「日本史」第2部31章（松田毅一・川崎桃太訳『フロイス「日本史」5』（中央公論社 1978年 113頁～114頁）

巡察使は同地に一ヵ月近く滞在し、聖霊の祝日を祝い終え、かの地方（摂津、河内など）のキリシタン宗団を訪問することとし、信長にその許可を乞うた。彼は大きいなる愛情に溢れた言葉をもってそれを許し、どこへなりと望むところに出かけ、欲するところに説教師を派遣するようと言った。（巡察使が）その訪問から安土山に帰り、信長に別れを告げ、下の地方に出発する運びとなった時、（信長）はさらに大きい別の好意を示した。その一つは、一年前に信長が作（らせ）た、屏風と称せられ、富裕な日本人たちが、（独自の）方法で用いる飾り付けの布（?）である。それは金色で、彼らの間できわめて愛好される（風物）が描かれている。彼はそれを日本でもっとも優れた職人に作らせた。その中に、城を配したこの市を、その地形、湖、邸、城、街路、橋梁、その他万事、実物どおりに寸分違わぬように描くことを命じた。この制作には多くの時間を要した。そしてさらにこれを貴重ならしめたのは、信長がそれに寄せる愛着であった。内裏はそれを見ようとして、彼に伺いを立て、気に入ったので譲渡されたい、と伝えたが、彼はとりあわず、その希望（をかなえること）を回避した。ところで、巡察使がまもなく出発することになったことを知ると、信長は側近の者を司祭の許に派遣し、「伴天連殿が予に会うためにはるばる遠方から訪ね来て、当市に長らく滞在し、今や帰途につこうとするに当り、予の思い出となるものを提供したいと思うが、予が何にも増して気に入っているかの屏風を贈与したい。ついてはそれを実見した上で、もし気に入れば受理し、気に入らねば返却されたい」と述べさせた。ここにおいても彼は司祭らに対して抱いていた愛情と親愛の念を示したのであった。

巡察使は自らになされた恩恵を深く感謝し、それは信長の愛好品であるから、また特に安土山に関して言葉では容易に説明しかねることを、絵画を通じ、シナ、インド、ヨーロッパなどにおいて紹介できるもので、他のいかなる品よりも貴重である、と返

答した。

元来日本人は新奇なものを見たがる強い好奇心を持っているので、安土山、都、堺豊後において、この屏風を見ようとして集まった人々の数はすこぶる多かった。そして一同の希望を満させ、男も女も自由に見物できるためには、それを教会（内）に展示せざるを得なかった。異教徒たちは、我らが信長から、彼がいかなる場合にも同国人に対してなすことのない、かような多大の好意を寄せられているのを見て、我らを果報者と呼んだ。

【解説】

イエズス会の宣教師ルイス・フロイスが記したイエズス会布教史。フランシスコ・ザビエルの来日から、文禄元年（1592）頃までのことがらが記されている。

ここには、織田信長が、巡察使アレッサンドロ・ヴァリニヤーノに「安土山図屏風」を与えた経緯が詳しく記されている。ヴァリニヤーノが帰国のあいさつに安土城を訪れた際、好意の証として屏風を贈ったこと、気に入らなければ送り返すよう伝えていたこと、内裏（天皇）が懇望したが、献上するのを断ったことなどが書かれている。

また屏風については、当時最もすぐれた画家に描かせたこと、城と城下町を詳細に、そして写實的に描かせたこと、「金色」と記されているので、水墨画ではなく、金碧画であることがわかる。

最後に、ヴァリニヤーノが帰国の途次、この屏風を人々に自由に観覧できるよう、教会に展示し、多くの人々がこの屏風を見に訪れたことが述べられている。

1581年の日本年報（村上直次郎訳・柳谷武夫編輯『新異国叢書3 イエズス会日本年報』上 雄松堂出版 1969年 93頁～95頁）

ビジタドールのパードレは、当所に約一カ月間滞在し、聖霊降臨祭〔一五八一年五月十四日すなはち天正一十九年四月十二日〕が過ぎて、この地方のキリシタンを巡視する許可を信長に請うたところ、彼は慈愛に満ちた言葉をもって許可を与へ、全領内希望の場所に説教師を派遣することを許し、教の弘布することは彼の大きい喜びのところであると言った。パードレがキリシタンの巡視を終って帰った時、信長は従前よりも大なる好意を表したが、その評判は直に日本全国に伝はり、大いに我等の信用を増した。

好意の一つは、信長が屏風 beobu と称し、日本の大身達が珍重する一種装飾用の幕を作らせ、約一年前日本の最も著名なる画工に命じて新市とその城の絵を少しも実際と相違なく、湖水諸邸宅その他一切をありのまま描かせた。そのために多くの時を費し、もし少しでも実際と相違するところがあれば、直にこれを消して新に描かせ、結局彼の満足するものができた。この屏風は甚だよくできた完全な作品であり、著名なる画工が非常に努力して絵を描いたものである故、信長は大いに満足してこれを珍重した。この屏風は大なる評判となり、一層これを高くしたるは、信長が特別の好意として少数の寵臣に観するにすぎなかったことである。この評判は内裏にも達し、信長に求めてこれを観、大いに満足して懇望の意を伝えられたが、信長は知らざる風をなし、これを贈ることを欲しなかった。信長はパードレが帰国せんとするを聞いて、使者を遣はし、甚だ遠隔の地より拝謁のために来り、長くその市に留り、信長がパードレ達に与へたカザの地を大切にすることを示したことを謝し、記念ならびに親愛の印として何か贈り、帰国の際携へ帰らせんと思ひ、所持の品について考へたが、立派な物は皆ヨーロッパより来たものであるから、満足するものがない。ただしパードレがコレジョを絵に描かす希望があらうかと考へて己の屏風を送付する、もしこれを覽て満足すれば留め置くべく、然らざれば送り返せと言はせた。而して未だこれを観ざるうちに、信長から他の使者が来て、その屏風を送ったが満足しなければこれを返すやう伝へた。この際使者の愉快なる態度は屏風を送った人の愛と親しみを反映した。パードレは非常に屏風を喜んだことを伝えるやう頼んだところ、信長は大いに満足し、これによってパードレに対する愛の大いなることを覚るであらう。この屏風は彼が非常に珍重するもので、内裏の求めをも断った程であるが、パードレに与へ、彼がパードレを尊敬することを日本全国に知らしむることを喜ぶと言った。このことは信長がパードレに好意を有する証拠で、もし一千クルサド与へたとしても、金銀には不足なきが故に、己の喜ぶものを割愛してパードレに与ふることには及ばないのである。このことは直に全市に伝はり、ついで周囲の諸国にも伝はって、異教徒もキリシタンも信長がかくの如き好意をパードレに示したことを聞いて驚き、パードレを幸福なる人と呼んだ。大身及び武士等は屏風を観るため直にわがカザに来り、三七殿もまた彼等に混って来り、大なる満足を表し、その父がパードレに示した好意を重視した。屏風を観覧する

ため来集した人々は、安土山のみならず、都、堺及び豊後、その他通過した各地においても非常に多数であったので、諸人に満足を与えるため聖堂に陳列して自由に観覧させることとした。そこで各階級の男女が集り、これを観た大身等は皆信長がこれをパードレに与へたことを知って大いに我等を尊敬した。日本の大身中第一を占むる公家 Cunque の一人が、パードレの帰る際、その通過すべき各地の領主にパードレを紹介し、信長より優遇歓待を受けたることを通知する書翰を与へた。書翰を宛てた人達の中に豊後の若き王及び薩摩の王ならびにその執政達もあって、これがパードレと薩摩の王との間に前に述べた交渉を行ふ際大なる助となった。また豊後ならびに下の地方においては、我等が信長よりいかに尊敬せられたかを聞いて、キリシタンの大身達の間でも我等に対する信用が増した。

1581年の日本年報（松田毅一監訳・東光博英訳『十六・七世紀イエズス会日本報告集』第Ⅲ期第6巻 同朋舎出版 1991年 58頁～60頁）

巡察使は同地に一ヵ月近く留まり、聖霊降誕祭を終えた後、当地方のキリシタン宗団を訪問するため信長にその許しを請うた。彼は司祭に許可を与え、領国に教えが遍く弘まることを大いに喜ぶので、領内の望む場所に説教師を派遣するがよいと慈愛あふれる言葉をもって答えた。（巡察）師がキリシタンたちの訪問から戻ると信長は以前よりもさらに大きな恩恵を彼に与えたが、その噂はたちまち日本中に伝わり、その結果、我らは諸人より多大な信用を得た。私が語るべき恩恵の一つは日本の諸侯が用いる類いの装飾用の壁（バンノ）を信長が作ったことで、これは彼らの間では非常に珍重されており、屏風（beobus）と称するものである。彼が屏風を作らせたのは一年前のことであり、日本でもっとも著名な画工に命じて、これに当市と彼の城を実物と寸分違わぬほどありのままに、また湖および諸邸宅などすみずみまでを能うる限り正確に描かせた。彼が実物と少しでも異なっていると思うところはことごとくすぐさま消して新に描かせたので、その（作業）には多くの時間を費やした。結局、彼の好み通りになったが、非常に出来栄えのよい完璧な作品であった。この屏風は著名な画工が多大の熱意をこめて製作したものであり、信長はこのような作品に満足しこれをたいそう珍重したので、屏風は政庁所在地一帯で大いに評判となった。その好評をさらに

高めたのはごく少数の人にしか見ることができなかったことであり、これは信長が特別な恩恵として彼の寵臣数人に（限って）見せたからである。評判は内裏の耳にも達し、彼は使者を介して信長にそれを見せるように請うた。（屏風を見て）大いに気に入ったので所望する旨信長に伝えたが、信長は知らぬ風をしてこれを決して贈ろうとはしなかった。彼は司祭が帰国する考えであることを知ると、彼の許に情愛あふれる丁寧な伝言を送り、（巡察）師はいとも遠方より謁見のために訪れ、当市に長期にわたって逗留し、信長が司祭に与えた家屋をたいそう尊重する意を示したので、（巡察）師に深く感謝するとともに記念および司祭たちに対する情愛の印として何かを贈り、同師が帰国する時に携えて行くことを望むが、貴重品について考えたところ、高価な物はことごとくヨーロッパからの招来品であるため意に叶うものが見つからない。ただし、（その）その学院（コレジオ）（神学校）を描いて持ってゆく希望があるならば（と考へて）、自分の屏風をお目にかけるために届けた。もし気に入れば留め置けばよいし、気に入らねば送り返すように、と伝えた。我々がまだ屏風を開いて見ぬうちに、さっそく、一人の武士が信長からの別の伝言を携えて到着し、屏風が（巡察）師の気に入らねばただちに彼の許へ送り（返す）ようにと伝えた。これは非常に楽しくかつ陽気に（行われた）ので伝言と使者はこれを遣わした人の情愛と親しみをよく表わしていた。司祭は屏風がどれほど気に入ったかを彼に伝え、信長はこれにたいそう満足して、司祭はこれによりかれの深い情愛を覚えるであろうと言い、なぜなら、かの品は彼が大いに気に入っているものであり、内裏がこれを求めても断ったほどであるが、司祭に贈ることは大いに喜びとするからである。それは彼が司祭に対していかに心を遣い尊敬しているかを日本中に知らしめるためであり、かつまたいかに恩恵を与えているかの証とするためである、たとえ彼に千クルザードを与えたとしても、金銀にこと欠かぬため大したことではないが、己れの好む物を手離して司祭に与えることは、それだけにきわめて重視すべきことであると述べた。この一件はすぐさま市中に、次いで周囲の諸国に伝わり、異教徒であれキリシタンであれ、信長がかくも多大の恩恵を司祭に与えたなどということを耳にするのがはなはだ新奇であったので驚嘆し、彼のことを幸福な人と呼んだ。大身および武士たちがさっそく屏風を見るために、我らの修道院に駆けつけ始め、彼らに混じって三七（信孝）殿も訪れて深い喜

悦を表し、彼の父が司祭に授けた恩恵を大いに高めた。

屏風を見るために参集した人は安土山はもとより、都、堺および豊後、その他司祭が通過した諸地方においても非常に多数であったため、諸人を満足させるには誰もが随意に見ることができるように教会で展示することが必要であった。こうして諸階層の男女が集まり、屏風を見た大身は皆、信長がこれを司祭に与えた次第を知って我らに好意を抱き、良い評価を示した。日本の大身の中で最上位にある公家（クゲ）たちの一人は司祭の帰途に際して通過すべき各地の領主に非常に好都合な書状を送って司祭を紹介し、信長の成長で浴した名誉と歓待について知らせた。わけても豊後の若い国主（大友義統）は彼が書状を認めた相手の一人であり、薩摩の国主およびその奉行たちにも（認め）、これらの書状は司祭たちが薩摩の国主と行なっていた先述の交渉を取りまとめるうえで少なからず助けとなった。豊後においても下の地方においても信長がいかに我らを気遣い尊敬しているかを知ってキリシタン諸侯の間でも我らの信用は増した。

【解説】

布教のために来日していたイエズス会士が、天正7年（1579）以降、毎年各地方区の通信をまとめて総長に送った報告書。従来、会士たちが随時随意に書き送っていた報告書を、巡察使ヴァリニヤーノが年報のかたちにまとめ送るよう制度をあらためた。ここでは新異国叢書と16・7世紀イエズス会日本報告集の二種類の翻訳を掲載する。

この中で屏風について書かれている内容は、先に見たフロイス「日本史」と大差ないものである。信長が屏風をいかに大切に思っていたか、帰国の途次、多くの人々に観覧させたことが述べられている。

「お湯殿の上の日記」天正8年8月（『続群書類従 補遺三 お湯殿の上の日記(七)』
続群書類従完成会 1990年 330頁）

十三日。左少弁よりむきくりの御ふたまいる。みやの御かた御あちやゝ御ちの人さかうくわんしやくせんゐんにことつえられてまいらるゝ。大すけとのよりかき。くものかちん御ふたともまいり。あづちのていかきけん七郎にひやうにかゝせて。のふ

なかけさんに入る。しゅんちやうけんもたせてまいる。こよひはこなたにをく。よるむら井せいししやうのすけ。たて物のほうしよまうのよし申。御心えのよし。

〔頭書〕おほせらるゝ。つかゑは左少弁。せいしつきてなかはしまてまいりて。ほう事はしんわうへと申。せいしーかいと申ほとに三かいつかはす。かたしけなきよし申候。

十四日。昨日のひやうふに。ちよくしよをと申まゝ。あくひつをそめいたす。つかいくわんしゅ寺中納言。日のゝ中納言。ひのゝしん中納言文をもちてのふなか所へゆく。大すけとのよりかき一ふたまいる。

【解説】

禁中の常御殿にあったお湯殿上の間において、天皇に近侍する女官たちが記した当番日記である。安土山図屏風が内裏に持ち込まれた経緯が詳しく記されている。

注目すべきは、屏風の作者が記されていることである。「かきけん七郎」と書かれており、誰を指すかが問題であるが、桃山絵画の巨匠である狩野松栄あるいは狩野永徳とするのが通説である。狩野松栄は通称源七、京都大徳寺聚光院の障壁画などを描いたことで知られる。狩野永徳は松栄の子。通称源四郎。上杉本洛中洛外図など多くの作品を手がけており、安土城天主の障壁画も永徳の手になる（『信長公記』）。安土山図屏風が描かれた天正8年（1580）には松栄は61歳で亡くなる12年前であるが、この頃の作品も残されており、引退していたわけではない。一方の永徳は37歳。いずれの可能性も否定できないが、永徳が安土城天主の障壁画を手がけたことを考えると、信長が渾身の作とした安土山図屏風の制作には永徳を当たらせたと考えるのが妥当ではないだろうか。

ドゥアルテ・デ・サンデ「天正遣欧使節記」（泉井久之助・長沢信寿・三谷昇二・角南一郎共訳『新異国叢書5 デ・サンデ天正遣欧使節記』雄松堂出版 1969年 437頁～439頁）

続いてつぎの木曜日ーそれは四月五日〔四日の誤りか〕であったがーこの日を教皇猊下はわれわれと親しく会話をなされる日に定められた。その日までにご神事が多端であったために、そのようなお話の会合を催すにはあまりにお忙しかったからである。

この私的なお話を交わす会合では、教皇猊下は多くのことに関してわれわれをこのう
えなくねんごろに御親しくおあしらい下さったうえ、日本のさまざまのことについて
実にたくさんのご下問があった。たとえば日本の島々にいるキリスト教徒の数はどれ
ほどであるか、いかに多くの寺院が、神及び聖者たちに奉献され、建立されたか、そ
こにヨーロッパのパドレたちはどのくらい生活してられるか、聖儀はどのような仕
方で行なわれるか、どうすればもっと多くの収穫が〔教会のために〕日々期待されう
るか、その他、このような種類の事柄であって、それに一つ一つわれわれが奉答申し
上げると、教皇猊下は、いかにも全キリスト教徒の共通の御父らしく深く喜ばれ、い
まにも雀躍あそばされんばかりであった。この日われわれはわが国から持参した若干
の贈物を敬意の徴として猊下に奉呈した。その贈物の中には巡察使のパドレ〔ヴァリ
ニヤーノ〕さまに信長贈物とした絵画もあり、この絵画のうちには信長が築いた安土
の非常に広大な城壁が描かれていた。この贈物を献上したとき、それらが猊下の高大
な尊厳に対してはるかに遠くそぐわないものであったにもかかわらず、猊下は大変ご
満足の様子をはっきりと示され、そしてただちに宮殿の一番奥のお部屋とご自身のご
書斎、すなわちもっぱら文学のご研究に充当あそばされたるお場所へ、われわれを忝
けなくもご案内下された。この場所はまことに拝観するにもっとも値する所であって、
どこもかしこも見事に描かれた種々の多くの画像で眼も醒めるばかりであり、いと高
価な出来上がりの多数の書巻で飾られていた。要するにこの部屋は猊下の至大の尊厳
と高位とにふさわしい偉観を示していたのである。そこからわれわれは画廊と名付け
られる一種の廊下に連れて行っていただいた。それは実に風雅な庭園へ通ずる猊下ご
専用の通路であって、その庭園は「ベルヴェデーレ」Belvederium と名づけられてい
た。そこからの眺めが美しくかつ勝れているために「見晴らし台」を意味するこの名
が付けられたのである。画廊も実に壮麗であって、壁面に掛けられたさまざまの浮彫
のみならず、壁自体が黄金その他種々さまざまの色彩を施され、あわせてその見事な
有様を言葉によってよく説明することが誰にもできるであろうか。私の言葉を俟たな
いで、どうかあなた方ご自身、心のうちで、教皇猊下の至大のご権能から推して想像
していただきたい。教皇猊下は安土の山が描かれているあの幾つかの画を、この見事
な画廊に陳列するように命ぜられた。それはわれわれのこの贈物が大切なもののうち

に数えられることをお示しになるためであった。それからしばらくして、あたりのすばらしさに見蕩れていたわれわれが、われに帰ったとき、教皇猊下はヨーロッパでわれわれが見た品のうち、われわれがもっとも喜んで故国へ持って帰りたいのは何々かのご下問になり、そしてそういうすべての品々の目録をこしらえて猊下ご自身のお手もとに届くようにせよと命ぜられた。これはもとより、かの最高位のパドレであらせられる教皇猊下が、万事につけて、あたかも愛児の願いを容れる父親のようになさろうという思召であって、それに先立って突然に崩御あそばされなかったならば、きっとすぐにご聴許下さったことであろう。

【解説】

ドゥアルテ・デ・サンデはイエズス会の司祭である。本書は、天正遣欧使節がその行程で見聞したさまざまなことがらを、使節4人の対話形式で記述したものである。巡察使アレッサンドロ・ヴァリニャーノがゴアにおいて、使節の日記をはじめとするさまざまな記録をもとに編術し、スペイン語で作成されたものを、デ・サンデがラテン語に訳し、マカオで刊行された。

この中では、使節がローマ教皇グレゴリオ13世に謁見し、さまざまな献上品を奉呈したことが記されている。「安土山図屏風」もその中に含まれていたが、教皇の尊大な權威に比して遠く及ばないと、低く評価されたにもかかわらず、教皇は大変満足し、「画廊」に陳列するように命じた、と記されている。

ダニエル・バルトリ編『耶蘇会史（『大日本史料 第十一編別巻之二 天正遣欧使節関係史料一』 203頁～205頁）

日本人等は日本より携へたる物を贈りしが、その材料の価値よりは、その工作の珍奇なるによりて、珍重すべきものなりき、そのうち、最も優れたるものは、かの地に於いて屏風と称する、二枚の家具にして、その一には安土山の新市、他の一には安土山の難攻不落の城を画きたるものなり、前に述べし如く、信長がその親愛の印として与ふべき最大なるものとしてパードレ・ヴァリニャーノに贈りしものなり、しかも信長はこれを世界に於ける最も秀絶なるものと考へ、日本の絵画及び工芸を示すものとしてヨーロッパに見せしめんと希望せしなり、全くかの国の風による、誠に精巧なる作

品にして、現時画筆を動かすに最も巧みなる画工が、千度画き直して初めて完全に信長の満足を得るに至りしものなり、信長は大いにこれを珍重し、大なる恩恵として、僅かに少数の人にこれを示したるに過ぎず、内裏、即ち日本の皇帝もその一人なりしが、大いに喜び、頻にこれを望みたり、されど信長は、金銀は山の如くして欠くこと無きも、かゝる優秀なる作品は、これに対して払ふべき財宝無しと言へり、信長がかくの如く珍重せしものをヴァリニャーノに与へしは、日本に於いては奇蹟にして、ヴァリニャーノには大なる光栄なりき、しかれども、その通過せしところに於いては、都に於いても、堺に於いても、また豊後に於いても、懇望せし大身等にこれを示さざるを得ず、大いなる煩となりたり、しかして絶えず煩累を蒙りしたため、公に陳列し、何人にて希望する者に観覧せしむるに至れり、教皇は愛の手より来るものは如何なる品にても嘉納せられ、これを示すため、この二枚の屏風はその壮麗なる陳列館に置かれたり、しかして、同所に於いて彼等に対して、その宝物とせる聖遺物及び書籍を示し、自ら彼等を案内し、彼等が大算術家イグナシオ・ダンテの地図の壁に掛けられたるを見終るまで待たれり、しかして彼等の去るに臨み、その国に携へ帰らんと欲する物あらば、提出せんことを命ぜられたり、

【解説】

ダニエルロ・バルトリは17世紀イタリアフェッラーラ出身のイエズス会士である。さまざまな分野の著作を多数世に出している。本書は、イエズス会士の書簡や報告書をもとに編術したイエズス会の歴史で、アジア編、中国編、日本編、イタリア編、イギリス編で構成されている。

この中では、屏風の形状について書かれているのが注目される。「二枚の家具にして、その一には安土山の新市、他の一には安土山の難攻不落の城を画きたるものなり、」とあり、屏風が一双で、一隻には城下町、もう一隻には城が描かれていると解釈できる。しかし、同じ著作を紹介した『安土町屏風絵探索プロジェクト学術調査報告書（平成18年度調査報告書）』（安土町 2009年）には、同じ個処について「その一枚には筆で新しい町が描いてあり、これとつながっているもう一枚には〈Anzuchiyama〉の城塞が描いてある。」と訳しており、ここからは二枚の絵は一つにつながっていると読め、安土山図屏風は、二曲一隻の屏風であると理解することも

可能である。

またローマ教皇に献上された後展示された場所として「イグナシオ・ダンテの地図の壁に掛けられた」とされているが、この場所は現在、バチカン博物館内の地図のギャラリーと呼ばれている場所にあたる。イグナシオ・ダンテはドメニコ会修道士で数学者でもあるが、16世紀初頭、ローマ教皇グレゴリオ13世の命で、地図のギャラリーを装飾するプロジェクトに携わったのである。

ウルバーノ・モンテ「年代記」（伊川健二「『ウルバーノ・モンテ年代記』にみる天正遣欧使節と織豊期の日本（2）」『東京大学日本史学研究室紀要』14 2010年 59頁）

〔彼らが〕教皇に贈ったものの中に、ナブナンガといわれる日本の首都を彩色した絵画がある。それは腕2本分〔約120センチメートル〕の高さで、長さは腕4本分である。

fra l'altre cose che donorno a sua santità fú un quadro dove è depinta la città principale del Giappone detta Nabunaga quale e alto due bracia, e longo quatro,

【解説】

本書はミラノの地理学者ウルバーノ・モンテ（1544～1613）の著作で、天正遣欧使節に関する記事を多く含んでおり、使節の肖像画も収録されている。

ここでは屏風の大きさについて触れられており、高さ約120cm、横の長さが約240cmとされている。2曲1隻とすれば、1扇の大きさは一辺120cmの正方形となる。

フィリップ・ヴァン・ウィングのスケッチ（ヴィンチェンツォ・カルターリ著／ロレンツォ・ピニョリーア増補『古代の神々の図像』所載）

【解説】

本書は、古代の神々の図像を集成したカルターリの原著を、ピニョリーアが増補改訂した際に、フィリップ・ヴァン・ウィングの安土山図屏風のスケッチを収録したも

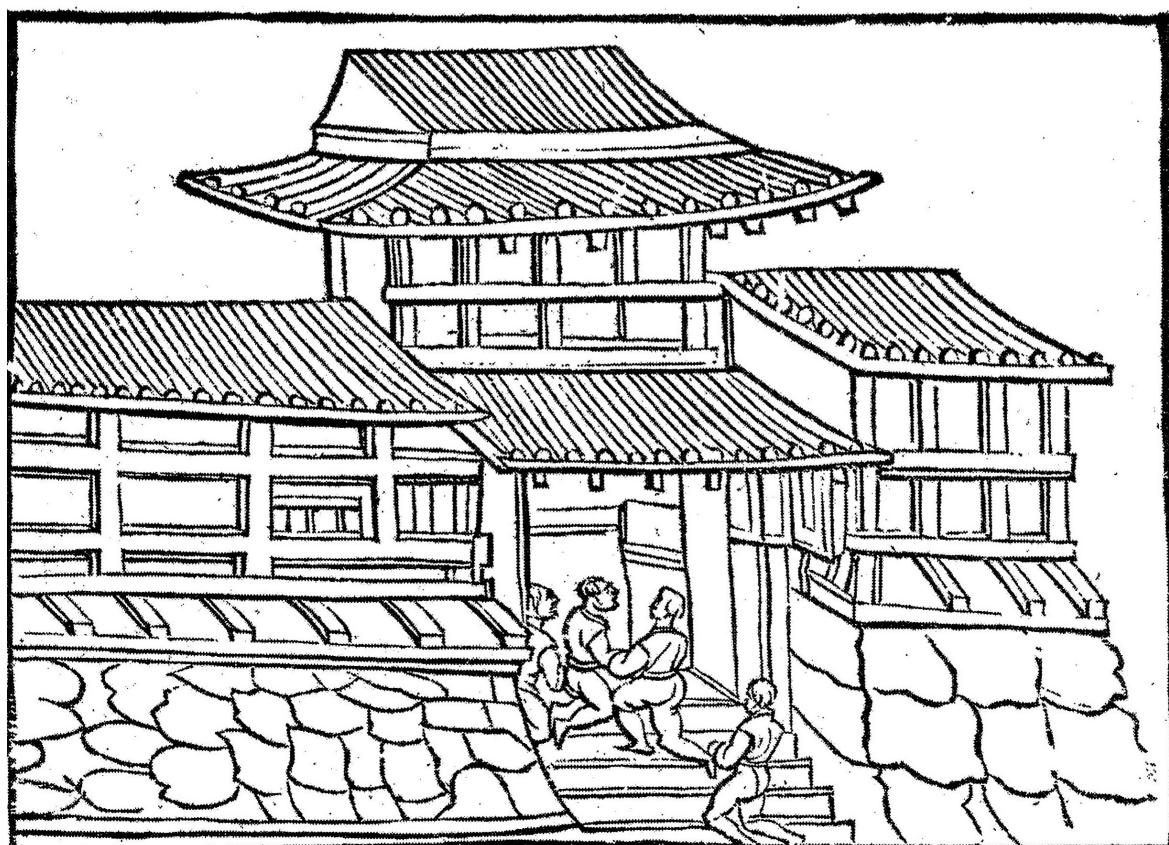
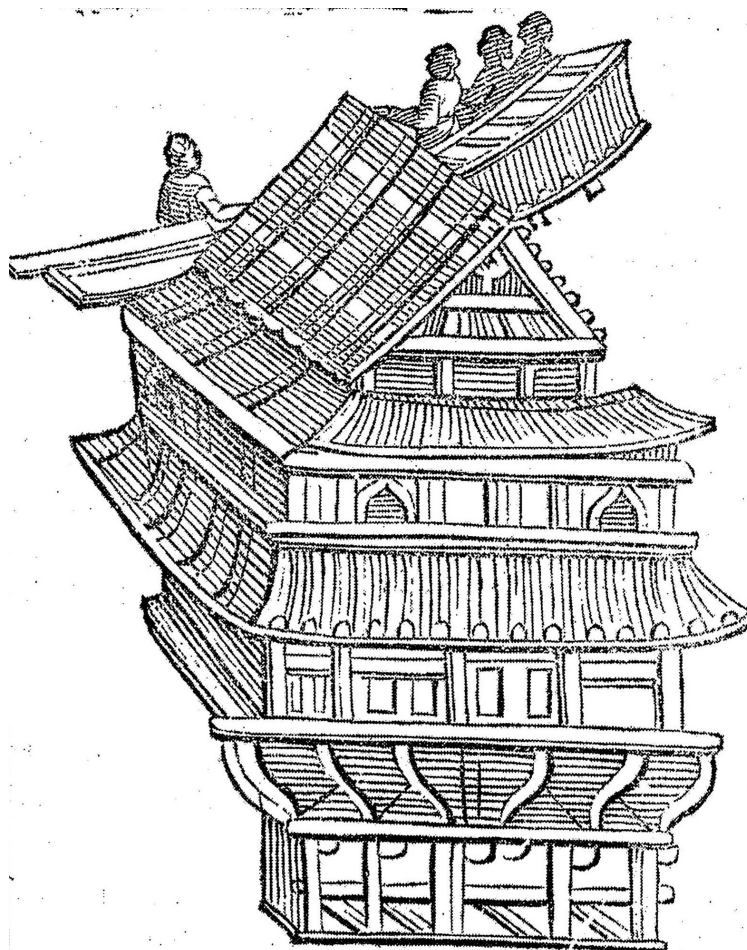
のである。

フィリップ・ヴァン・ウィング（1560～1592）はルーヴァン（現ベルギー）出身の考古学者である。考古学者としてさまざまな古代の遺物を調査研究しているが、その過程でそれらの精密なデッサンを行っている。考古学者として調査対象を正確に模写し、記録することに注力していたのである。このことは、ウィングが残した安土山図屏風のスケッチの資料的性格を考える上で、重要なポイントとなる。

ウィングがバチカンの地図のギャラリーに入室したことは、彼が友人である地理学者オルテリウスに宛てた書簡から明らかとなる。1592年7月15日付けのその書簡には、ウィングが、苦勞の末にギャラリー入室の許可を得たこと、オルテリウスが希望していた「ラティウム」の地図の模写を行ったこと、コンパスなどの器具を使わずに模写したが、他の誰かがそうした器具を使って模写したものに引けを取らない正確な図が作成できたことが記されている（書簡の全訳については、カルターリ著・ピニョリーア増補・大橋喜之訳『西欧古代神話図像大鑑〔続篇〕』八坂書房 2014年 199頁～ 参照）。その書簡には、屏風や安土といった文言は出てこないが、ピニョリーアがウィングのスケッチを収録した際の図版の添え書きに「先に名を記したフィリッポ・ヴィンゴミオは日本人たちの諸神性に捧げられた断崖上の神殿群を描画したが、かれはそれを教皇グレゴリウス13世に贈るため日本人使節たちがもたらした書画の数々から写したものと語っている。」（『西欧古代神話図像大鑑〔続篇〕』36頁）と書かれており、このスケッチが屏風を描き写したものであることがわかる。

ピニョリーアの改訂版は幾度が改判されており、ウィングのスケッチが掲載されるのは1624年版が最初である。その経緯については今も研究が進められており、スケッチが伝えられる背景に、広範な東洋学者のネットワークが存在したことが指摘されている。

また、この図像が安土城のどの部分を指すかについても議論がわかれており、信長が安土山内に建立した摠見寺ではないかという見解も出されている。いずれにせよ、安土山図屏風の図像がまったくわからない現在、そのイメージを推測する有力の手がかりとして注目されているところである。



【参考文献】

- 『安土町屏風絵探索プロジェクト学術調査報告書（平成18年度調査報告書』（安土町 2009年）
- 竹本千鶴「『安土図屏風』を描き残したフランドル人」（『日蘭学会会誌』第34巻第1号（通巻57号） 2010年）
- 大橋喜之「Ⅰ 永徳の『安土山図屏風』について分かったこと分らないこと」（カルターリ著・ピニョリーア増補・大橋喜之訳『西欧古代神話図像大鑑〔続篇〕』八坂書房 2014年）
- 大橋喜之「Ⅱ ピニョリアと微細なものへのまなざし」（カルターリ著・ピニョリーア増補・大橋喜之訳『西欧古代神話図像大鑑〔続篇〕』八坂書房 2014年）
- 伊川健二『世界史のなかの天正遣欧使節』（吉川弘文館 2017年）
- 伊川健二「天正遣欧使節の史料学」（『WASEDA RILAS JOURNAL』8 2020年）
- 新保淳乃「安土山図屏風調査の現状」（『幻の安土城』復元プロジェクト・歴史セミナー資料 2023年）
- マーク・アードマン「ヴァン・ウィングが描いた安土図屏風スケッチの再考」（『幻の安土城』復元プロジェクト・歴史セミナー資料 2023年）
- 竹本千鶴「『安土山図屏風』のスケッチをめぐって」（『幻の安土城』復元プロジェクト・歴史セミナー資料 2024年）

Capitolo 1 Scopo e contesto del progetto

MATSUSHITA Hiroshi

Il progetto di restauro “Castello Incantato di Azuchi”, avviato nel 2019, mira a chiarire quale fosse il vero volto del castello di Azuchi, tuttora avvolto nel mistero, e a dargli una forma visibile per farne conoscere il valore e il fascino ai più, con lo scopo di rivitalizzare la prefettura e la regione.

Per completare il restauro del Castello di Azuchi è essenziale poter esaminare i documenti relativi al castello, e l'unico documento pittorico raffigurante l'esterno dell'edificio è il “Paravento Azuchiyama”. La prefettura di Shiga e il comune di Azuchi (oggi città di Ōmihachiman) hanno condotto ricerche sul campo sulle tracce del paravento, donato al Papa e poi scomparso, che tuttavia non è stato ancora ritrovato. Per poter portare a termine il progetto di restauro “Castello Incantato di Azuchi”, abbiamo ritenuto necessario indagare sul “Paravento Azuchiyama” e abbiamo quindi avviato un progetto di ricerca in tal senso.

Per raccogliere informazioni sui documenti relativi al Castello di Azuchi, e in primis sul “Paravento Azuchiyama”, abbiamo innanzitutto creato una pagina multilingue sul sito della prefettura di Shiga, in cui vengono richieste informazioni agli utenti. Oltre alla pagina abbiamo realizzato anche un volantino, con lo stesso nome del sito, da inviare ai commercianti di antichità e alle istituzioni che trattano documenti di valore storico, come antichi scritti o illustrazioni. Abbiamo anche chiesto alle associazioni della nostra prefettura presenti all'estero di fare pubblicità al sito.

Sono seguite le visite del nostro governatore alla Nunziatura Apostolica in Giappone e all'Ambasciata d'Italia in Giappone, nonché la visita in Vaticano del vicesegretario e del presidente dell'assemblea prefettizia, con lo scopo di richiedere la collaborazione nella ricerca del paravento.

Abbiamo incontrato i membri fondatori della Rete di Ricerca del Paravento

Azuchiyama (ASRN), coinvolta per molti anni nella ricerca del paravento, e con loro abbiamo concordato di proseguire lo scambio di informazioni.

Teniamo dei seminari di storia sul tema del “Paravento Azuchiyama”, dove presentiamo gli ultimi aggiornamenti sui risultati delle ricerche.

Nel 2024 abbiamo istituito un gruppo di indagine allo scopo di condividere conoscenze sulla storia degli scambi culturali tra il Giappone e l’Europa e di cercare indizi utili al ritrovamento del “Paravento Azuchiyama”. Le conoscenze condivise all’interno del gruppo vengono poi messe a disposizione del pubblico durante i seminari. Pubblichiamo inoltre un rapporto per pubblicizzare gli ultimi risultati delle ricerche e per disporre di un formato cartaceo con cui condividere più facilmente i risultati.

Capitolo 2 Aggiornamento sulla ricerca del “Paravento Azuchiyama”

SHINBO Kiyono

Questo capitolo descrive lo stato attuale delle ricerche sul “Paravento Azuchiyama” condotte dalla “Rete di Ricerca del Paravento Azuchiyama”, un gruppo di ricercatori volontari formatosi nel 2016.

Analizzando i documenti storici del tempo per comprendere le circostanze in cui l'Ambasciata Tenshō consegnò il paravento e altri doni a Papa Gregorio XIII, abbiamo scoperto dei documenti inediti, tra cui una descrizione dettagliata del paravento, nella collezione dell'orientalista padovano Pinelli. Siamo riusciti a supportare con prove documentali la tesi secondo cui l'Ambasciata avrebbe consegnato il paravento al Papa durante un'udienza informale e, per quanto riguarda l'identificazione della “Galleria” del Palazzo Apostolico dove il Papa avrebbe espresso l'intenzione di esporre il paravento, ci siamo accorti che la “Galleria delle Carte Geografiche” non era l'unica candidata, come precedentemente ipotizzato, ma che poteva anche trattarsi della “Loggia della Cosmografia”.

Poiché non esistono documenti che indichino l'ubicazione del paravento dopo la sua consegna al Papa, per testare la possibilità che il paravento sia stato acquisito da familiari del pontefice abbiamo esaminato attentamente gli inventari dei beni mobili delle famiglie pontificie delle generazioni successive, nonché i documenti riguardanti la gestione dei beni del Palazzo Apostolico e abbiamo compilato un elenco dei documenti nei quali non abbiamo trovato alcuna registrazione in merito.

Abbiamo esaminato le xilografie contenute nel libro “Immagini degli Dei Indiani” di Pignoria, unico documento illustrato del Paravento Azuchiyama. Abbiamo ricostruito le circostanze in cui gli schizzi di Philips van Winghe, raffiguranti il Paravento Azuchiyama, alla morte di lui nel settembre 1592 sarebbero stati inviati,

insieme alle bozze, prima nelle Fiandre e poi ad Aix-en-Provence, dove sarebbero stati riprodotti da Peiresc, e infine consegnati al padovano Pignoria. Abbiamo esaminato gli originali delle lettere inviate da Peiresc a Pignoria, che sono documenti di grande importanza storica, giungendo alla conclusione che le illustrazioni e le informazioni derivate dagli schizzi di Winghe fossero molto limitate.

Come si deduce dalle lettere, con la missione dell'Ambasciata Tenshō in Europa l'interesse per le regioni situate ad est dell'Europa occidentale (il cosiddetto Oriente), collettivamente chiamate "Indie", aumentò e, nella prima metà del XVII secolo, informazioni sull'Oriente, compreso il Giappone, circolavano sotto forma di lettere e interazioni dirette tra orientalisti, filologi e collezionisti antiquari di Tournai, Aix-en-Provence, Padova e Roma. Dopo aver cercato informazioni sui membri di questa rete di intellettuali nota come la "Repubblica delle Lettere" abbiamo concentrato la nostra ricerca sul Giappone, sulla missione dell'Ambasciata Tenshō in Europa e sul Paravento Azuchi-yama, riuscendo a identificare un certo numero di autori che ne avevano fatta menzione.

In futuro pensiamo di basarci su questi orientalisti per indagare più ampiamente sul livello di interesse e accettazione di cui godevano le opere artigianali dell'Estremo Oriente, come il Paravento Azuchi-yama, al fine di contribuire allo studio della storia degli scambi culturali tra Oriente e Occidente agli inizi dell'era moderna.

Capitolo 3 Storia della ricerca del “Paravento Azuchiyama”

KIDO Masayuki

Nel 1580 padre Alessandro Valignano, un missionario che aveva fatto visita a Oda Nobunaga nel Castello di Azuchi, era di ritorno al suo paese di origine dopo aver finito di visitare il castello appena costruito. Nobunaga regalò al prelado il suo paravento preferito come souvenir. Egli pensava di tornare a casa portandosi il paravento, ma finì per fermarsi a Macao e, nel 1582, il paravento fu consegnato a Papa Gregorio XIII dai quattro giovani dell'Ambasciata Tenshō inviati in missione a Roma. Successivamente fu esposto per un certo periodo nella “Galleria delle Carte Geografiche”, ma poi scomparve improvvisamente e la sua ubicazione è tuttora sconosciuta. Il paravento donato da Nobunaga raffigura nella sua interezza il Castello di Azuchi e il borgo sottostante ed è considerato un documento indispensabile per il restauro del castello. Perciò in molti attendono con ansia il suo ritrovamento. Questo capitolo racconta la storia e lo stato attuale delle ricerche del paravento, divenuto un reperto storico di grande importanza.

Il paravento di Nobunaga e la storia degli scambi culturali con le missioni tornarono alla ribalta durante il periodo Meiji, quando Tomomi Iwakura guidò una missione negli Stati Uniti e in Europa. Iwakura, venuto a conoscenza del paravento durante il suo viaggio, si rese conto dell'importanza della storia degli scambi culturali e procedette a visitare varie strutture religiose e a svolgervi delle indagini. Dopo il suo ritorno in Giappone, la sua opera fu portata avanti dal professor Naojirō Murakami dell'Università Imperiale, che raccolse e pubblicò una serie di documenti correlati alla vicenda. Egli fece alcune nuove scoperte, come quella relativa al paravento di Evora, ma non riuscì a trovare il paravento di Nobunaga. Successivamente, nel periodo Shōwa, l'archeologo Seiryō Hamada insistette sull'importanza del paravento di Nobunaga e, nel 1931, scrisse due libri: “La Missione Europea dei Giovani dell'Ambasciata Tenshō” e “A proposito del

Paravento Azuchiyama”. In seguito, vari ricercatori tra cui Yoshitomo Okamoto, Shigetomo Kōda e Kiichi Matsuda si recarono in Europa per continuare le ricerche. Nel frattempo la prefettura di Shiga, che stava valutando un piano per restaurare il torrione principale del castello di Azuchi, poté nuovamente constatare l'importanza del paravento e decise di verificarne l'esistenza.

Nel 1980 istituì un gruppo di esperti che, fino al 1986, sotto l'egida del Ministero degli Affari Esteri e delle ambasciate, condusse indagini sul campo in Vaticano. Tuttavia il paravento non fu trovato e la ricerca fu annullata a causa dei costi troppo elevati. Tra il 2004 e il 2009, il Comune di Azuchi(oggi città di Ōmihachiman) condusse un'indagine, ma non fece alcuna scoperta e l'iniziativa fu anch'essa annullata a causa dei costi elevati. Le persone coinvolte nell'iniziativa cittadina avviarono una ONLUS, grazie alla quale l'attività di ricerca continua ancora oggi. Nel 2019 la prefettura riprese nuovamente a cercare il paravento come parte del nuovo piano per il restauro del torrione principale, il progetto “Castello Incantato di Azuchi”, ed entrambe le iniziative sono attualmente in attività.

Capitolo 4 “Il Paravento Azuchiyama nei documenti”

MATSUSHITA Hiroshi

Dai numerosi documenti relativi al “Paravento Azuchiyama” si sono potute ottenere le seguenti informazioni.

Innanzitutto, il paravento fu donato al Papa dopo che Oda Nobunaga lo ebbe regalato all'inquisitore Alessandro Valignano in segno di amicizia. I testi scritti affermano che gli disse di restituirlo se non gli fosse piaciuto, e che l'imperatore lo desiderava ma Nobunaga glielo rifiutò per darlo a Valignano. È scritto anche che Valignano, durante il viaggio di ritorno, lo avesse esposto in una chiesa perché tutti potessero vederlo liberamente, e che molte persone vennero a vederlo.

Per quanto riguarda la realizzazione del paravento, secondo i documenti esso fu dipinto dal miglior pittore dell'epoca, che dipinse il castello e il borgo sottostante in modo dettagliato e realistico. Poiché il paravento viene descritto come “dorato”, è chiaro che non si tratta di un dipinto a inchiostro ma di un dipinto in stile Kimpeki (blu-oro).

Per quanto riguarda l'autore del paravento, si ritiene possa essere stato uno dei maestri della pittura Momoyama, Kanō Shōei o Kanō Eitoku ma, considerando che Eitoku era responsabile dei dipinti murali del torrione principale del Castello di Azuchi, è probabile che Nobunaga abbia affidato a lui la realizzazione del Paravento Azuchiyama, che era l'opera a cui teneva di più.

Per quanto riguarda la reazione di Papa Gregorio XIII quando ricevette il “Paravento Azuchiyama”, pare che, pur avendolo valutato negativamente in quanto non all'altezza della maestà papale, ne fu in realtà molto contento e ordinò che fosse esposto nella galleria.

Per quanto riguarda la forma del paravento, si può dedurre che si trattasse di un paravento in due pezzi, con due schermi costituenti un unico paravento. Le dimensioni del paravento dovrebbero essere circa 120 cm di altezza e 240 di

larghezza.

Chapter 1. The purpose and process of the project

MATSUSHITA Hiroshi

The project to reconstruct mysterious Azuchi Castle started in FY 2019 with the aim of clarifying the actual state of Azuchi Castle, which is enveloped in mystery, presenting its visual image, and promoting the value and attractive features of the castle, along with the area of its site and Shiga Prefecture at large.

To reconstruct Azuchi Castle, it is essential to survey and research materials about Azuchi Castle. The only pictorial work that depicts an external view of Azuchi Castle is a pair of folding screens of Mt. Azuchi, which was once gifted to the Pope but has been missing to date. In quest of this pair of folding screens, Shiga Prefecture and Azuchi Town (now Omihachiman City) surveyed likely sites, but the screens have not yet been discovered. In this context, the members of the reconstruction project of Azuchi Castle also began searching for Mt. Azuchi folding screens.

To collect information about materials on Azuchi Castle, particularly Mt. Azuchi folding screens, on the website of Shiga Prefecture, we have launched a multi-language webpage, titled “Looking for materials related to AZUCHI-JO castle.” At the same time, we prepared leaflets of the same title and sent them to antique dealers and other organizations dealing in historical materials, such as ancient documents and pictures. We have also asked the overseas offices of the association of people from Shiga Prefecture to promote the webpage.

Subsequently, the governor of Shiga Prefecture visited the Apostolic Nunciature to Japan and the Embassy of Italy in Japan. In addition, the vice governor and the chair of the Shiga Prefectural Assembly visited the Vatican to seek its cooperation in search of the folding screens.

Moreover, we met with core members of the Azuchi Screens Research Network (ASRN), who have been searching for Mt. Azuchi folding screens for many years,

and reaffirmed with them that we would continue sharing related information.

In addition, we organize historical seminars on the theme of Mt. Azuchi folding screens, where we release the outcomes of the latest survey and research program.

In quest of traces of Mt. Azuchi folding screens, in FY 2024, we began to hold research meetings to share knowledge about the history of cultural interactions between Japan and Europe. Outcomes of the research meetings are released to the public at historical seminars. At the same time, we issue reports on the latest outcomes of the survey and research program and publish books to share them with the public.

Chapter 2. The latest situation on the survey and research of Mt. Azuchi folding screens

SHINBO Kiyono

In this chapter, I will describe the latest situation on and outcomes of the survey and research program of Mt. Azuchi folding screens, conducted by the Azuchi Screens Research Network (ASRN), a group of volunteer researchers formed in 2016.

Firstly, we conducted extensive research on historical documents at the time of the Tensho Embassy, the first official Japanese delegation sent to Europe in 1582. The embassy offered diplomatic gifts, including the folding screens, to Pope Gregory XIII. Among the old collection of Pinelli, a researcher of Oriental studies in Padua, we found historical materials, including one that shows a physical description of the folding screens. Moreover, we have confirmed that the folding screens and other gifts were handed over to the Pope when the embassy members were informally received in audience. Concerning the Pope's statement that the folding screens should be set up for display in a galleria (gallery) inside the Apostolic Palace in the Vatican, we have suggested that in addition to the Gallery of Geographical Maps, which has been assumed to be the site suggested by the Pope, the Gallery of Cosmography should be considered as a possible site.

To date, no materials have been discovered indicating the location of the folding screens after they were offered to the Pope. Considering the possibility that they were owned by papal families, we investigated the inventories of properties owned by families of the successive popes along with the list of properties within the Apostolic Palace. We also prepared a list of the historical materials of which we were unable to find relevant records.

Next, we surveyed woodblock prints in *Immagini degli Dei Indiani* (images of Indian deities) by Lorenzo Pignoria. The woodblock prints are known as the only

extant pictorial materials depicting Mt. Azuchi folding screens. We confirmed that the following process was taken before the creation of the woodblock prints: Philips van Winghe reproduced Mt. Azuchi folding screens, and after his death in September 1592, his drawings were sent to Flanders together with his manuscripts. Peiresc in Aix-en-Provence then reproduced the drawings, which were offered to Pignoria in Padua. Based on study of the original letter written by Peiresc to Pignoria, which is an essential material for our research, we have suggested a hypothesis that Winghe's drawings provided only partial images of and information on the screens.

As indicated in the letter, after the visit of the Tensho Embassy, European people began to pay keen attention to the East (the so-called Orient), which they called the "Indies." In the first half of the 17th century, Orientalists, philologists, and antique collectors in Tournai, Aix-en-Provence, Padua, and Rome shared information on the East, including Japan, through correspondence and face-to-face exchanges. Through the thorough studies of the members of the intellectual community known as the Republic of Letters, we were able to specify several individuals who were particularly eager to learn about Japan, the Tensho Embassy, and Mt. Azuchi folding screens and who might have written about the folding screens.

Based on the studies of these Orientalists, we plan to expand our research targets to include Europeans' attitude towards artifacts from the Far East, including Mt. Azuchi folding screens, so that we can help advance research on the history of East-West interactions in the early modern period.

Chapter 3. The history of research on Mt. Azuchi folding screens

KIDO Masayuki

In 1580, the Jesuit missionary Alessandro Valignano visited Oda Nobunaga, a leading warlord in Japan at the time, at Azuchi Castle, which had been completed shortly before. Since Valignano was leaving Japan before long, as a farewell gift, Oda Nobunaga gave him the folding screens that he treasured more than any other articles. Although Valignano had initially planned to return home with the folding screens, as he was ordered to stay in Macau, he asked the four young members of the Tensho Embassy, who were dispatched to Rome in 1582, to offer the folding screens to Pope Gregory XIII. Subsequently, the screens were displayed in the Gallery of Geographical Maps in the Vatican, but they disappeared all at once, and their whereabouts are still unknown. Since the folding screens, offered by Oda Nobunaga, depict Azuchi Castle and its nearby town, they are regarded as essential materials for the reconstruction of Azuchi Castle. Accordingly, their discovery is expected by many related parties. In this chapter, I will describe the history of the exploration for the folding screens and outcomes of the research concerned.

The history of the folding screens and the Tensho Embassy was revealed to the world once again when the Iwakura Mission, a Japanese diplomatic embassy led by Iwakura Tomomi, was sent to the U.S. and Europe in the Meiji Period (1868–1912). When Iwakura learned the history of the Tensho Embassy, he recognized the importance of international interactions and began searching for the screens by visiting related facilities. After his return to Japan, this task was succeeded by Dr. Murakami Naojiro, a lecturer at the Imperial University (now the University of Tokyo), who collected and released many related materials. Although he found important documents used as lining of the *Ēvora byobu* (folding screens found in

Évora, Portugal), he was unable to discover the folding screens given to the Pope by Oda Nobunaga. Later, in the Showa Period (1926–1989), an archaeologist named Hamada Seiryō suggested the vital importance of Oda Nobunaga's folding screens and wrote books on the Tenshō Embassy and Mt. Azuchi folding screens in 1931. Subsequently, researchers, including Okamoto Yoshitomo, Koda Shigetomo, and Matsuda Kiichi, visited Europe to conduct surveys. In this environment, Shiga Prefecture recognized the importance of the folding screens for its project to reconstruct the main keep (donjon) of Azuchi Castle and began research to verify their presence/absence.

In 1980, the prefecture established an advisory panel of experts, which conducted a field survey in the Vatican until 1986 by seeking cooperation from the Ministry of Foreign Affairs of Japan and related Japanese embassies. Since the screens were not discovered, the survey project was abandoned in consideration of its cost-effectiveness. Even though the exploration was continued by Azuchi Town(now Omihachiman City) from 2004 to 2009, it was also abandoned due to the low cost-effectiveness. However, members of the city's exploration team established an NPO to continue searching for the screens. Meanwhile, in 2019, Shiga Prefecture began searching for them once again as part of its new project to reconstruct the main keep of Azuchi Castle. The search for the screens is currently under way along with the reconstruction project.

Chapter 4. Mt. Azuchi folding screens described in related materials

MATSUSHITA Hiroshi

Concerning the Mt. Azuchi folding screens, several materials indicate the following facts:

First, the folding screens were offered to the Pope in the following process: Oda Nobunaga gave the screens to the Jesuit missionary Alessandro Valignano, a Visitor supervising the entire Jesuit mission in Asia, as a sign of goodwill. According to a document, when giving the present, Nobunaga warlord told Valignano to return the screens if he did not like them. It is also indicated that the emperor wished to have the screens, but Nobunaga refused the emperor's request and gave them to the Jesuit. On his way to leave Japan, Valignano displayed the folding screens in churches to enable many people to view them freely. It is written that many people visited churches to see the folding screens.

Concerning the production of the folding screens, a document indicates that they were painted by the best artist at the time and that the artist was ordered to depict the castle and the nearby town thoroughly and realistically. Since gold color is mentioned, rather than Indian ink drawings, the screens featured colorful paintings with golden foils.

Concerning the artist of the folding screens, it is considered that they were painted by either Kano Shoen or Kano Eitoku, both being great masters of Japanese paintings in Azuchi Momoyama Period (1573–1603). Of the two, Kano Eitoku is more likely to have produced the screens. Since he created the mural paintings of Azuchi Castle's donjon, it is reasonable to assume that Oda Nobunaga commissioned Kano Eitoku to create the folding screens of Mt. Azuchi.

As for the reaction of Pope Gregory XIII when he was offered the folding screens, it is written that the Pope was greatly satisfied with them and ordered that they

be displayed in a “gallery,” even though the screens were considered of low value and regarded as not suitable for the Pope’s great authority.

The folding screens probably comprised a pair of two connected panels. As for their dimensions, it is considered that the pair was about 120-cm high and about 240-cm wide.

「安土山図屏風」をはじめとする 16・17 世紀の文化交流にかかる調査研究報告書 1

「安土山図屏風」研究の最前線

Rapporto di ricerca sugli scambi tra Giappone ed Europa nel XVI e XVII secolo, incluso lo
"Paravento Azuchiyama" 1

L'ultimo stato della ricerca sullo " Paravento Azuchiyama"

Reserch report on the 16th and 17th century Japanese-European exchanges, including the
"Azuchiyama Screen" 1

The latest status of research into the "Azuchiyama Screen"

2 0 2 5 年 3 月 発行

Pubblicato a marzo 2025

Published in March 2025

編集・発行：滋賀県文化スポーツ部文化財保護課

Modifica e pubblicazione : Governo della prefettura di Shiga Divisione per la
protezione dei beni culturali

Edit and publishing : Shiga Prefectural Office Cultural Properties Protection
Division

520-8577

滋賀県大津市京町四丁目 1 番 1 号

Kyomachi 4-1-1, città di Otsu, Prefettura di Shiga

Kyomachi 4-1-1, Otsu City, Shiga Prefecture

TEL : 077-528-4678 FAX : 077-528-4956 mail : castle@pref.shiga.lg.jp

「安土山図屏風」をはじめとする 16・17 世紀の文化交流にかかる調査研究報告書 1

「安土山図屏風」研究の最前線

Rapporto di ricerca sugli scambi tra Giappone ed Europa nel XVI e XVII secolo, incluso lo
"Paravento Azuchi-yama" 1

L'ultimo stato della ricerca sullo " Paravento Azuchi-yama"

Reserch report on the 16th and 17th century Japanese-European exchanges, including the
"Azuchi-yama Screen" 1

The latest status of research into the "Azuchi-yama Screen"

2025年3月発行

Pubblicato a marzo 2025

Published in March 2025

編集・発行：滋賀県文化スポーツ部文化財保護課

Modifica e pubblicazione : Governo della prefettura di Shiga Divisione per la
protezione dei beni culturali

Edit and publishing : Shiga Prefectural Office Cultural Properties Protection
Division

520-8577

滋賀県大津市京町四丁目 1 番 1 号

Kyomachi 4-1-1, città di Otsu, Prefettura di Shiga

Kyomachi 4-1-1, Otsu City, Shiga Prefecture

TEL : 077-528-4678 FAX : 077-528-4956 mail : castle@pref.shiga.lg.jp